
空色の魔女

来栖ゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空色の魔女

【Nコード】

N7379W

【作者名】

来栖ゆき

【あらすじ】

魔術師は多くあれど魔女という存在は今や稀薄だった。魔女が現れたと聞けば、権力者達はこぞって手に入れようと戦まで始める混沌とした時代――。

騎士団長だった父が亡くなり、城から追い出されたマルティナは、オネット村に住む騎士道精神溢れんばかりな18歳の乙女。村が盗賊団に襲われた際、内に眠る魔力が突然目覚めてしまった！？保護を求めて魔女の集落へ向かう事にしたマルティナは、幼馴染の騎士ライナスと次期領主のジャスティン、何かと秘密の多い自称・傭兵

のヴィンセントと旅に出る事に……。中世ヨーロッパを舞台にした、
ツンデレ魔女と3人の守り人が綴る逆ハーレム、ラブ ロマンسف
アンタジーです（多分）

「もう少ししとやかな娘だったらねえ……」

それ、この前も聞いた。

「せっかく隣の村から求婚にきてくれた方なのに、突き飛ばすなんて……」

だって急に口づけしようとしてきたのよ？

「怒って帰られたわ、こんな乱暴な娘とは結婚できないって」

あんな人と結婚なんてこっちから願い下げね。

「マルティナが美人だって噂を聞いて、わざわざ来てくれたのよ？」

今度からその噂に『乱暴者の』ってつけておくといいわ。

「ちよつと、聞いてるの？ さつきから黙ってないで」

リリーさんがいらいらとした口調で話しかけてきた。大声の独り言が終わったと思ったら間髪入れずにマルティナへの愚痴を言い始める。

よく晴れた空と同じ青色の瞳。腰まで伸びた黒髪はカラスの濡れ羽色を連想するような艶つややかな漆黒。

マルティナは先月18歳になったばかりだった。

2年ほど前からだろうが、リリーさんは頼んでもいないのに勝手に仲介役を引き受けて、結婚適齢期の若者を捕まえてはマルティナを紹介する。うまくいかないところとして愚痴を言いに来るのだ。

彼女是要するに近所のおせっかいなおばさん。『私はこの村のほとんどの結婚を仲介したのよ』が自慢だ。嘘か本当かは確認した事がないからわからない。

ここは領主・オールブライト伯爵が統治する領地内にあるオネツト村。川と森に挟まれた自然豊かな立地であり、領主の城からも王都からも随分離れている、のどかで平和な田舎だ。

森での狩りと放牧、小麦などの収穫なりわいを生業としている農民が主で、

旅人さえもめったに通らない。村から北に向かった丘の上に建つ立派なお屋敷は、領主が一年のうち狩りの季節に来る一時いつときの為に建てられたもので、それ以外は使われていなかった。

そんな田舎では結婚相手も、自然と子供の頃から知っている顔見知りに限られる訳なのだが、村の若者が全員マルティナと結婚する気がないと解ると、リリーさんは村外から探してきたのだった。

この人はなぜこんなにも躍起になって結婚させようとするのだろうか……。

マルティナにとって、彼女の存在はここ最近の頭痛の種になっていた。そして、リリーさんの独り言はまだ続いている。

「お城にいい人でもいたのかい？　ここまで結婚を拒むなんて」

マルティナは沸かしたお湯に茶の葉を入れ、カップと共にテーブルへ運ぶ。

「マルティナ、いいかい？　昔は城に住んでたかもしれないけど、今はただの村娘だ。8年も経ってちや貴族サマだって忘れてる。それに身分相応ってものがあるだろう？」

怒りに任せてガシャンと力任せにお盆を置いたら、リリーさんはわざとらしく驚いた顔をして、もう少し女性らしく、と小言を言い始める。

ほんと、もう付き合いきれない。

「まあリリー、来ていたの？」

マルティナのイライラは最高潮に達しつつあったが、リズおばさんが丁度良いタイミングで帰って来てくれた。

「おばさんお帰りなさい。あたし畑に行ってくるわ」

マルティナはこの場から逃れるため、ジョンおじさんを手伝いに行く事にする。笑顔を貼り付けリリーさんにごゆつくり、と伝えると用意した昼食の入ったバスケットを持ちドアへ向かう。

「マルティナ、まだ話は——」

ボタンと後ろ手に閉めたらリリーさんの甲高い声がプツリと途切れた。

「はあ……」

やっと解放された事で自然とため息が出でしまう。

「まさか、隣の村まで行くとは思わなかったわ」

リリーさんは一体いつまでこんなことを繰り返すのだろうか……。少し考えたら背筋に悪寒が走った。

「もう結婚してもいい歳？ そんなの、なんでリリーさんが決めるのよ。アンやジェシカが結婚したからって、何で私まで結婚しなきゃいけないの、よっ！」

ブーツで小石をコツンと蹴り上げたら、それはきれいな放物線を描いて飛んでいった。

黒髪によく映える薄水色のワンピースはマルティナが大股で歩けば、裾がめくれ黒いブーツが見え隠れした。この乗馬用のブーツは数年前、領主の息子であるジャスティンが譲ってくれたもの。紐で結ぶ編み上げタイプなので脱げにくく、ほっそりしたデザインのお陰で動きやすい。少し踵^{かかと}があって靴底も硬いから、蹴ればきっと相当のダメージだ。

ちなみに、まだ靴底の硬さは誰にも試した事はない。

リリーさんから言わせれば、ブーツなんて女性の履き物ではなくて、もちろん小石を蹴るなんてもつてのほか……。目撃されれば何を言われるかわかったものではない。

納屋に寄って鋏^{くわ}を取り、肩に担いで畑までの道を早足で歩く。リリーさんの出現で随分遅くなってしまった。

ジョンおじさんとリスおばさんは、マルティナの血縁者ではない。母親はマルティナを生んだ後すぐ亡くなった。オルブライト家に仕える騎士団長という身分だった父は、マルティナに剣術や馬術などを教えながら、騎士見習いの男の子達と同じように育てた。そしてマルティナが10歳の時、戦に赴いた父は敵との一騎打ちに敗れ死んだ――。

新たな騎士団長に就任したクライヴ卿は女の騎士など品位を落とす、と後ろ盾のないマルティナを城から追い出した。

天涯孤独となった彼女を引き取ってくれたのがジョンおじさんとリズおばさん。父に昔助けられた恩があるというたったそれだけの理由で。

ジョンおじさんもリズおばさんも、マルティナのやる事に反対せずのびのびと育ててくれた。剣術と馬術の経験があるマルティナは、村の男の子よりも活発で喧嘩も強かったし、鋤を持てば畑仕事も手伝い、斧を持てば薪割りもする。

男の子と一緒にあって遊ぶ事もあれば、女友達をいじめた男の子を追いかけて回して逆に泣かせてしまう事もあった。その度にジョンおじさんに叱られたが、我儘に育たなかったのは2人からの愛情と父の騎士たる教えを忠実に守っていたからだろう。

お陰で、しとやかな乙女というより行動力のある元気な女性になってしまった。

そして、年頃になるにつれて美しく成長したマルティナを放っておく男はいない。彼らは何かにつけて話し掛けたり、手伝おうかと声をかけ始めた。そのたびに必要ないと一蹴する彼女は、思春期を過ぎて友達から女性として見るようになった彼らの気持ちにはまったく気づいていない。

少し前までは一緒に遊んだり喧嘩をした男友達が、気づいたらマルティナを女性扱いし、男だからと自分が優位に立とうとする。

マルティナの事を、まるで弱い者を扱うように接してくる。彼女はそれが腹立たしいと思っていた。

子供のころは喧嘩もかけっこも木登りも、男の子に負けず一番だったのに、いつの頃からか立場が逆転したのだ。

その頃から男の子たちはマルティナを相手にしなくなった。男の子同士で集まり、マルティナが近づくと女は仲間に入れない、と言った。

そして現在、彼らは難儀しているマルティナを見つけては手を貸すと言ってくるのだった――。

「私が女だからって、一人で何もできないと思わないでよね!」

村から少し離れた誰もいない丘の上で思い切り叫ぶ。思い出した腹が立ってきたのだ。

4、5年前、アンの赤い髪をからかっていたジャックが、先月彼女に求婚した。嫌だ嫌だと逃げ回り、その都度マルティナに助けを求めに来たアンがそれを承諾した。

結婚した二人はとても幸せそうだった。

アンに理由を聞いたら、彼女は「そういうものよ」と笑っていたけれど……。

「あんなに嫌がってたのに、意味わかんない」

考えあぐねていると、不意に視界の端に黒いものが移った。何の気なしに森に視線を移す。

村と隣接した森から何者かが現れ、フラフラと2、3歩進むとその場に倒れた。

「大変……！」

マルティナは駆け寄ろうとして立ち止まる。

「傭兵よね？ 何でこんな田舎に……？」

戦に敗れてここまで逃れてきた雇われ兵か、それとも村を襲いに来た山賊の類たぐいだろうか。一人ならばいいが集団だと、彼らは村を襲い金品と女子供を強奪して、畑に火をかけることもあると聞いた。

村の人に知らせるべきだろうか。しかし、もし襲ってきたとしても、相手が一人なら自分で何とかできる。

「この機会に女だからって見下している人たちをぎゃふんといわせてやるわ！」

マルティナは勇み足で丘を下って森へ向かった。

うつ伏せに倒れた男に忍び足で近づく。汚れた亜麻色の髪に色褪せたマント、腰には剣。風貌から山賊ではなさそうだ。どこかの城に雇われた傭兵が逃げてきたのかもしれない。

「死んでいるのかしら？」

さっきからぴくりとも動かない。鍬の柄でこつんと頭をつついたらかすかなうめき声が聞こえた。まだ生きているようだ。

「み、水……………」

マルティナは持っていたバスケットの中から水を取り出す。しかし、どこの誰かも解らない男を助け起こす事に気が引けて、迷った拳男の頭に水をだばだばとかけてみた。

男は急に飛び起きる。

「きゃっ」

瀕死の男が急に動いたことに驚いたマルティナは、持っていた水を手放した。

それに気づくと男は地面に落ちる直前で瓶を掴む。

「あ、危ねえ……。コラ、もつたいないことをするな！」

彼はマルティナを一喝してからぐびぐびと飲み干す。

「もつたいないって……………」

水を恵んだ相手に怒鳴られるなんて腹が立つわ、と内心思っていると、足元に置いたバスケットを目ざとく見つけた男は、マルティナが止める間もなく中のパンを取り頬張った。

「ちよつと！」

それは私とジョンおじさんの昼食なのに……………。

「うまいな……………」

もごもご言いながら2つめのパンに手を付け、水で押し流す。すごい速さで口に入れるのを、マルティナはただ啞然と見ているしかできなかった。

その間に男を観察する。顔も服も泥で汚れている。革の鎧は随分使い込まれていて、身体にびったりしていた。確認したくはないが、こびりついた茶色の染みは血だろうか……………。

髪もぼさぼさで髭も生え放題。董色の瞳だけが、彼の内なる強さを物語っていた。

きつと強い傭兵なのだろう。

水の瓶が空になっていたので、仕方なくバスケットに入れた赤ワインを差し出す。男はそれも水のように飲み干しながら、初めてマルティナの存在に気付いたかのように凝視した。でも手にはパンと

ワイン。そして口を動かす事は止めないらしい。

「ふう、死ぬかと思った……」

男は一息入れてからそう言った。

「それ、私たちの昼食だったのに」

ワインは自分から渡したのだが、ちよと文句を言ってみたら、彼は助かった、と豪快に笑う。本当に死にそうだったのか疑問だ。

「俺は、ヴィンセントだ」

彼はそう言って右手を差し出してきた。騎士流の握手を知っている事に驚きつつ、マルティナも右手を出す。

指先が触れた瞬間、バチツと痛みが走った。

「わっ」

今のは何？

それに気を取られていたらぐいと引っ張られた。

「きゃあ！」

その瞬間に気づく。彼は握手を求めたのではなく引っ張り起こして欲しかったのだ。

ヴィンセントもまさかマルティナが倒れてくるとは思わなかったのだろう、咄嗟に抱きかかえるようにして庇いながら後ろへ倒れた。お陰で衝撃のほとんどは彼の背中に吸収されたのだが……。

頭を起こしたら髪の毛が革の鎧のどこかにひっかかっていた。

「痛っ……やだ、もう！」

恥ずかしいのと人に見られたくないのとで、焦ったマルティナは髪の毛を引きちぎって離れようとした。

「ちよっとまって」

それに気付いたヴィンセントは髪を掴むマルティナの手を握って止めさせる。彼はマルティナの髪を丁寧な手つきではずし始めた。

特に痛みもなく、取れたと言われ顔をあげたらヴィンセントと間近で目があった。

董色の瞳を、髪と同じ色のまつ毛が覆っている。引きこまれそうなほど綺麗な色。近くで見たら思ったよりも若いのかもかもしれないと

マルティナは密かに値踏みする。

革の鎧を着ているので解らないが、たくましい上腕二頭筋から察するに羨ましいほどの胸板なのだろう。マルティナが欲しても手に入らなかった筋肉を彼は持っている。

「よく大人しくしてたな、もういいぞ？」

しばらく見ていたら、よしよしと頭を撫でられた。

「それとも……何か続きを望んでいるのか？」

いたづらっぽく笑うヴィンセントの顔を見て、自分がどこにいるのかを意識したマルティナは、はっと気付いて離れた。

「あ、あなたが引つ張ったんでしよう！」

威厳を取り戻したマルティナは、急いで鍬を拾って立ち上がる。

「あなた、何者？ 言っとくけど、この村を襲つてもたいしたもの
は手に入らないわよ？」

ヴィンセントは、鍬を構えるマルティナを一瞬驚いた顔をして見上げたが、面白いものでも見るように目を細めた。

「襲いはしないさ、俺はただの雇われ傭兵だ」

「雇われ傭兵が、何でこんなところにいるのよ？」

「……実は、逃げてきたんだ」

目を逸らしたヴィンセントは言いにくそうにしていたが、胡散臭そうに睨むマルティナをちらりと見上げると、観念したのかこれまでの経緯を説明し始める。

「西のある領主の元で戦に加わっていたんだが、勝利を確信した領主は俺の提示した金額を支払うのが惜しくなったらしい。戦の混乱に乗じて背後から襲つて来たんだ」

「それはひどい話ね」

背後から襲うなんて騎士道精神に反する行いだ。そしてヴィンセントは追手を撒きながら命からがらここまで逃げてきたらしい。

「怪我、してるの？」

ところどころにこびりついた血の汚れを見ながら尋ねた。

「俺の血じゃない……」

それを聞いたマルティナの顔に一瞬恐怖の色が浮かぶ。

それに気付いたのかどうかわからないが、ヴィンセントは今度は自分で立ち上がった。思ったより背が高い。

マルティナは彼を見上げる。男の人ってずるい。どうして誰もが女性よりも背が高くなるんだろうと思った。マルティナも背が高い方だが、彼は村の若者よりも逞しく背が高い。

一体、どんな鍛え方をしているのだろうか。傭兵と話す機会など後にも先にもない……。よし、後で聞いてみよう！

「で、いくらで雇われてたの？」

「は？ ああ……まあ、その……」

ヴィンセントは言いにくそうに頭をかく。

「何よ、言えないの？」

「金貨50枚だ」

「……じゃあけっこう強いよね？」

聞いておいてなんだが、マルティナは金貨の価値を知らなかった。城に居た頃はお金という存在をあまり意識していなかったので、いまいち価値が解らない。今マルティナがやりとりしている硬貨は銅の物が主だった。

きつと自分の腕に自信があるが故の提示金額なのだろう。

「ところで、この村で傭兵は雇わないか？」

「傭兵が必要な村に見える？」

ここは小麦畑と森しかない村だ。医者にかかるには城へ行かなければならないとても辺鄙へんぴで平和な村。

北の町や村には稀に盗賊が出ると聞くが、マルティナの知る限り、この村にそんなものは今まで現れた事がなかった。

「残念だけど、こんな田舎で傭兵の仕事はないわ。それに金貨1枚も出せないと思う。金貨なんて一度も見た事ないもの。領主の城に行けばあるかも」

馬で1日の距離を指さす。

「そうか……」

ヴィンセントはマルティナの指さす方向を眺める。つられてマルティナも眺めた。

ここから見えるはずもない城に想いを馳せる。10歳まで育った家。騎士見習いの男の子達と一緒に剣術や馬術の訓練をした。

あの頃はまだ子供だったから、男でも女でも体格の差はあまりなかった。天性の才能なのか、マルティナは何でもうまくこなしていた。同年代の男の子たちの中ではいつも一番で、自分は大きくなったら父のように強くなるんだと夢見ていた。

あの頃は楽しかった。何の疑いもなく、自分が強くいられたから。自分が女だからと負い目を感じる事もなかったから……。

「そういえば名前を聞いていなかった」

急に尋ねられて現実に引き戻される。

「私はマルティナよ」

「マルティナ……かわいい名前だ」

ヴィンセントはにつこりと微笑む。

どこの男も初対面では同じ事を言うものだなとマルティナは思った。

「で、何で鍬を構えているんだ？ いざとなったら身を守る為？」

「そうよ、あたりまえでしょう？ あなた不審者だもの！」

そう言くとヴィンセントは急に噴き出して笑い始めた。随分長く笑い続けるので、鍬を持つ自分が恥ずかしくなってくる。

「な、なによ！ 何がおかしいのよ！」

「お、お前……面白い、女だな……」

やっと話せるようになったヴィンセントはとぎれとぎれに言う。

「お、面白いですって……」

初対面で、美しいとか可憐だと言われる事は多々あるが、面白いと言われたのは初めてだ。

「ずいぶん無礼な人なのね！こっちだって、初対面で大笑いされるのは初めてだわ！」

「初対面で抱きついてきたのもあんたが初めてだよ」

もはやヴィンセントは涙目だ。

顔がかあつと赤くなるのが感じる。誤解されるようなことを言わないでもらいたい。

「あ、あれは違うわ！ あなたが握手を求めてきたのかと思ったの！」

「握手なんて、騎士同士の挨拶じゃないか、城で働いていた経験でもあつたのか？」

そう聞かれるとは思わなかった。

「父が……騎士だったのよ」

「騎士の父親がいて、なんだってその娘がこんな田舎にいるんだ？」

「もう、なんだっていいでしょ！」

なんで今さらこんな話をしてしまったのだろうか。誤解を解くために必死すぎて余計な事まで言ってしまった。

村の人もマルティナが城から来た事は知っているが、父親が騎士だった事はおじさんとおばさん以外は知らない。話せばマルティナが貴族出身だという事がばれてしまうから。

「とにかく、この村にあなたが満足する仕事はないわ。じゃ、さようなら」

会話を無理矢理終了させて、空の瓶をバスケットに戻した。一度家に戻ってまた昼食を用意しなければならぬ。

マルティナは踵を返して家までの道を早歩きで向かった。これ以上ヴィンセントと話していると、余計なことまで言ってしまうかもしれない。

「待つて、マルティナ。」

ヴィンセントはあつという間に追いついてマルティナと並んで歩く。少し小走りなマルティナに対し、彼は大股で歩幅を合わせる。

ここでも男女の体格の差を見せつけられた気がしてうんざりした。

「何なのよ！」

マルティナは振り向かずに叫ぶ。

「仕事を探しているんだ」

「だから無いって言うてるでしょ！」

「傭兵の仕事じゃなくてもいい。畑仕事でも、助けてくれたお礼もしたいし。何でもするから——」

「ほんとに？」

助けたお礼、と聞いてマルティナは立ち止まる。

ジョンおじさんの小麦畑は、この季節の割に種植えが遅れていた。それというのも手伝うと志願した村の若者の好意をマルティナがすべて拒否してしまったから。

先月腰を痛めたおじさんが万全ではないため、かなりの遅れが生じているのだ。

人に頼むのは気が引けるし負けを認めなければならぬが、ヴィンセントならば食事のお礼として働いてもらえばいい。村の人間ではないので一生負い目を感じる事もないだろう。

「いいかも！」

誰にも借りを作らず、しかも畑を手伝ってくれる人員を手に入れたことに、マルティナは自分自身を褒めたい気分になった。

自然と顔がほころぶのは止められない。

「うちの小麦畑、手伝ってくれる？ もちろん助けたお礼として」
ヴィンセントにもう一度確認をした。じつと見上げていたけど、彼は何も言わずに黙ってしまったのでマルティナはあら、と首を傾げる。

そういう意味で言ったのではなかったのか……。

「あんた、誘惑してるの？ それともそれ無意識？」

「何がよ？」

「無意識か……。あんたにそれやられた男はかわいそうだな」

「どういう意味よ！ なんなのよ？」

ヴィンセントは一人納得するとくっくつと笑いだす。

「なんなのよ、ねえ！」

たまに、同年代の男性と会話をしていると不意に相手が黙る時が

あつた。顔を赤くして目を逸らされる事もしばしば……。

自分が何か変な事を言ってしまったのだらうと思っていたが、いくら問いただしてもその理由を教えてもらえない事はなかった。

「ねえ、何？ 自分だけ知ってるなんてずるいわ、教えてよ！」

「あんた、強いよな！」

強いと言われて嫌な気はしなかったが、これでは意味が通じない。自分は一体何をして強かったのだろうか。

「で、どこでもいいから寝泊りできる場所も提供してくれると助かるんだが」

ヴィンセントは話を戻した。教えてくれる気はないらしい。

「図々しいわね、まあ、いいけど。寝泊りする場所を提供する代わりに、しっかり働いてもらうわよ？ もちろんお金は払わないけど、その代わり食事は出すわ」

「ああ、かまわない。助けてくれたのがマルティナでよかった」

そう言われるのは、正直嫌いじゃない。困っている人を助ける、それが騎士だった父の教えの一つだから。

なんだかうれしくなった。

でもこれは一人で決めていい問題じゃない。おじさんとおばさんに相談しないと――。

「あら、いいじゃない。手伝ってくれれるなら大歓迎だわ、ねえあなた？」

「ああ、傭兵なら畑仕事も問題ないだろう」

おじさんとおばさんにヴィンセントの話をしたら二言返事で許可を得る事ができた。

少しくらいは疑って欲しいのだが、マルティナが連れてきた人ならば問題無いと言うのが二人の結論だった。

「おじさん、おばさん！もし極悪非道な大悪党だったらどうするのよ！」

「本人を前によくそんな事が言えるな……」

隣でヴィンセントが呆れていたけど、こつもすんなり許可が取れると少し抵抗もある。

「本当に大丈夫かしら……」

マルティナは小首を傾げて自分の選択が正しかったのかを考えた。見れば見るほど胡散臭い……。

夕食後、マルティナは蠟燭のランタンを手に、ヴィンセントと外へ出る。

満ち始めた月明かりの夜道を二人で歩いた。納屋まではほんの少しの距離、ランタンはいらなかったかもしれないとマルティナは思った。

食事中も彼は人当たりの良い笑顔で、おじさんとおばさんと楽しそうに会話をしていた。どうやら西の村では羊毛生産が盛んだった。

羊なんて興味ないけど、食事中も抜かりなくヴィンセントを見ていたが、怪しい動きは見られなかった。

疑いすぎるのはよくない事だわ、とマルティナは頭を左右に振る。

そんなマルティナの不可解な行動に、ヴィンセントは少し驚いていたが彼女は気付いていなかった。

「どこで働いていたの？ その、傭兵として……」

「まあ、色々だ」

急に話かけられたヴィンセントは言葉を濁して答える。

どうして彼は傭兵仕事の話になると黙るのだろうか。アヤシィ……。

マルティナは眉間に皺を寄せてじつと観察する。きっと彼は何かを隠している。暴いてみたい気持ちもあるが、マルティナ自身もあり言いたくない秘密を持っているため強要できない。

「本当に色々だよ、西の方は領主同士での諍い^{いさか}が多いんだ」

ヴィンセントはそんなマルティナに気付いて取り繕う。

「雇われ傭兵は金さえ貰えればどこへでも行く。ここは平和すぎて実感が沸かないかもしれないけど」

確かにこの平和な村以外では、マルティナは城での生活しか知らない。もちろん傭兵の仕事についてもまったくわからない。

「わかったわ、ヴィンセントを信用する」

苦笑いで微笑むヴィンセントは嘘をついているようには見えなかった。

「マルティナ、もう一回言って？」

「だから、信用するってば！」

「そっちじゃなくて」

にこにこしながらヴィンセントはわけのわからない事を言い出した。意味が解らず首を傾げてマルティナは目で問う。

「もう一度俺の名前を呼んで。さっき初めて呼ばれた」

「は……？」

そうだったかしら？

呼ばれるのを待つヴィンセントを前にして、マルティナはもう一度名前を呼ぶ事に抵抗を感じた。意識すれば、それがなにか特別な事を意味する気がして急に恥ずかしくなる。

「必要もないのに言わないわよ！」

ヴィンセントを置いてさくさくと歩みを進めると、背後からくつくつと忍び笑いが聞こえてきた。

なんて腹の立つ男！

彼はマルティナをからかう事に楽しみを見出しているようだっただ。

「さあ、ここがあなたの寝泊まりする場所よ！」

ヴィンセントには納屋で寝泊りしてもらうことになった。まだ得体の知らない男を、自分の隣にある空き部屋に寝泊りさせる訳にはいかない。

畑仕事の道具が置いてある納屋の隅に多めに藁を敷いて、ヴィンセントの寝床を作っておいた。それを見て彼は問題ない、と答える。

「明日からちゃんと働いてね」

「ありがとう、おやすみマルティナ」

ランプを手渡し、扉を閉めようとしたところで思い出す。

「それから、昼間言った事だけど、あたしの父が騎士だって事、村の人は知らないの。誰にも言わないで」

念のため忠告をしたら、ヴィンセントは意地の悪い笑みを浮かべた。

「へえ……内緒なんだ？」

「何よ、もしかして言いふらすつもり？」

月が雲に隠れたのだろう、ふいに辺りが暗くなる。

「これをネタに、マルティナに言う事を聞かせる事も可能って訳だ

……」

マルティナは身の危険を感じて、無意識に一步後ずさったら腕を掴まれた。

「どうしてやるうか」

ヴィンセントの囁き声が耳元で聞こえる。いつの間にか彼は、マルティナの取った間合いを詰めていた。

「あ、あたしを脅そうっていうの？」

ランタンの明かりだけではヴィンセントの表情は読み取れない。

「自分の秘密をよく知りもしない人間に簡単にばらしたら、こうなるって事だ」

ヴィンセントがランタンを顔の高さまで持ちあげると、からかいの表情で笑う彼の姿が見えた。

「道が暗いから、ランタンはマルティナが持つて行け。転んで怪我でもされたら俺の責任になりかねん」

掴んだ腕を持ちあげてその手にランタンを握らせると、ヴィンセントはおやすみ、と言ってマルティナの目の前で扉を閉めた。

「な、な、なんなのよー！！」

あとに残されたマルティナは、思いの限り大声で叫んだ。

幸いにも納屋が村の中心から離れているお陰で、誰も家から顔を出すことはなかった――。

風は秋の香りを運び、過ごしやすい日々が続く。ヴィンセントのお陰で畑も順調で、おじさんの腰も快方に向かっている。

すでにヴィンセントが村に来て2週間ほど経っていた。

髭も剃り髪も若干短くなって小奇麗になった彼は、23歳だと言われれば歳相応に見える。初めて会った時はもう少し年上かと、マルティナは思っていたのだ。

「そういえば、そろそろ狩りの時期ねえ」

おばさんが昼食を作って持つてきてくれたので、畑仕事をしていたマルティナ達は休憩を取っていた。

「狩りの前に畑がなんとかなって、本当によかったわ」

「なんだマルティナは狩りもするのか？」

男らしいな、と感心するヴィンセントに、マルティナはそんな事しないわよと訂正する。

可能であれば一度くらいはしてみたい気もするけれど。

「領主様は秋になるとオネット村に来て森で狩りをするの。あたしはその間だけお屋敷で働いているのよ」

城から使用人を大勢連れてくる訳にはいかない。マルティナを含

めた年若い娘はお屋敷で掃除や洗濯を手伝い、その分賃金を貰うのだ。

「そうだ、ヴィンセントもちゃんとした仕事先を探しているのなら領主様に頼めばいいわ。傭兵なんだから、お金にならない畑の手伝いをずっと続けるよりもそっちの方がいいでしょ？」

「俺が城に行ったら寂しくなるぞ」

「ならないわよっ！」

ハハッと豪快に笑うヴィンセントにマルティナは落ち葉を投げつける。それはヴィンセントに届かずにはひらひらと舞っただけだった。それから2、3日して領主と護衛の騎士が村に到着した。

毎年恒例となっている、狩猟と豊穣の女神ダイアナを迎える祭りは、必ず満月の夜に行われた。領主が酒を振る舞い、村人が畑で採れた作物で料理を振る舞う。そして数日後、女神が帰る日に領主が狩りで得た肉を振る舞うのが慣わしだった。

「ねえねえマルティナ！」

アンがマルティナの隣に立ち一緒にジャガイモの皮を剥きはじめた。夜の祭りに備えて村人たちは朝早くから準備をしている最中だった。

「ヴィンセントって、イイ男よね。さっきタマネギの袋運ぶの手伝って貰っちゃった！　すごく優しくて素敵なの。傭兵なんですって？」

マルティナは、きゃあきゃあと楽しそうに話す新婚のアンを不思議そうに見つめた。

「アン、ジャックはいいの？」

彼女は、それとこれとは別よ、とニコニコしながら詫びれもなく言う。

「彼はマルティナの好い人なの？」

「ぎゃあ」

手が滑って親指のうす皮が剥けた。出血しなかったのは幸いだ。

「アン！ そんなわけないでしょう！」

「なあんだ、マルティナの好きな人じゃないなら村の女の子、遠慮しないわよ？」

遠慮？ あれで本当に遠慮しているのだろうか……。

ヴィンセントが村に来た頃は皆、傭兵という存在に少なからず不快感をあらわにしていたのだが、いつのまにやら彼の人当たりのよさに警戒心を解いていった。

ふと視線を巡らせばヴィンセントは村の男達と共に準備を手伝っている。

そしてその姿を盗み見ながら囁き合ったり、彼に手伝ってほしいと上目遣いで話しかける女の子達は、みんな笑顔で可愛らしかった。「別に、遠慮しなくていいわよ。でもきつと領主様と一緒に城に行っちゃうわ」

傭兵だもの、と呟くと、アンはこちらを見ながらつまらないわ、と頬を膨らませる。

「ずっとここに居られても困るわよ」

マルティナは苦笑いでそう言っていると、剥いたジャガイモで一杯になった桶をよいしょと持ち上げた。

よろよろとふらつきながら鍋の元へと向かうマルティナに気付いたヴィンセントが、持とうかと尋ねる前に彼女はシャーっと猫のように威嚇するのであった。

「そうね、村の女の子が一人残らず悲しむでしょうね……」

その中にマルティナを数えたアンは、言えば彼女が怒り狂う事を知っていて小声で呟く。

マルティナに置いていかれたヴィンセントは、クスクスと笑うアンの気付くとお手あげだと両手を上げた。

「あの娘^こって、可愛げがなくてとっても可愛いでしょ？ 泣かせたら私が許さないわよ？」

「マルティナはいい友達を持ったもんだな。肝に銘じておくよ」

そんな会話など聞こえていないマルティナは、二人が見守る中、

無事にジャガイモを鍋へと投入させていた。

「すごい祭りだな……」

村の中心広場には大きな焚き火たきびが、狩猟と豊穡の成功を祈る為にと豪快に焚かれていた。その周りでは、村人や貴族の面々が踊ったり歌ったりと各々盛り上がっている。炎の——女神ダイアナの前では農民も貴族も関係なく無礼講なのである。

「こつというのは初めて？」

マルティナは隣に立ったヴィンセントを見上げる。炎の明かりは随分遠くて、月明かりだけでは彼の表情はあまり読み取れなかったけれど、その感嘆の声は本物だ。

「マルティナを探していたんだ。ここは暗いとよく見えないな」

そう言うつとヴィンセントは彼女の手を握る。

「踊りに行こう！」

「わわっ、ちよつと待って」

ぐいと手を引かれて数歩進むが、マルティナはヴィンセントの手からなんとか逃れる。

「踊るなら一人で行ってよ！ ていうか、さっきまで入れ替わり立ち替わり、女の子に誘われてたじゃない」

彼は全ての誘いをやんわりと断っていた。せつかく誘ってくれる相手がいるのなら、何も暗闇の中を探してまで自分を誘わなくてもいいではないか……。

「マルティナがいいんだ」

「行かない！」

ヴィンセントの誘いに即答すると、マルティナはプイと視線をそらす。

「踊っていただけませんか、お嬢さん？」

誘い方が悪いと思ったのか、彼は次に片膝について手を差し出してきた。先程、騎士たちが村の少女達を踊りに誘う際、同じ動作を

していたのを見た。彼女たちは喜んで手を取って踊っていたけれど……。

「だから行かないってば！ あたしは踊らないわ！」

やれやれ、と立ち上がるとヴィンセントは腰に手を当てて言う。

「マルティナは踊れないのか」

その言葉にかあつと頬が熱くなるのを感じた。

「ち、違うわよ！ 人前で踊るのが苦手なだけ！ 別に、踊れないわけじゃないんだから！ そもそも、踊りとか興味ないし！ 全然、まったく！」

「その割にはよく見てるじゃないか。俺が誘われて断ってたの何で知ってるんだ？」

表情を読み取ろうと、ヴィンセントはマルティナに近づく。目を細めて意地悪そうな笑みを口元に湛えているのが月明かりで見えたという事は、逆に顔が真っ赤になって焦っている自分の顔も、ヴィンセントには見えているという事で……。

「た、たまたまよ、たまたま！ ちょっと自意識過剰なんじゃないの！」

「マルティナが健気にも見つめてくれていたら、俺だって自意識過剰にもなるよ」

「見つめてなんか——」

ないわ、と続けようとするが、思い返せば確かにヴィンセントを目で追いかけていたかもしれないと気づく。意識すれば途端に恥ずかしさが込み上げてきた。

「だから、その……」

うまい言い訳が見つからず、マルティナが一步下がればヴィンセントはそれ以上の間合いを詰めながら大股で一步近づく。それを繰り返すうちマルティナの背中に建物の外壁が当たった。右か左に逃げようかと辺りを見回せば、ヴィンセントは逃がすものと自身の両腕と壁でマルティナの退路を断つ。

「ちよっと、なんの真似よ！」

目をそらしたら負ける気がして、マルティナはヴィンセントの顔を見上げた。どうか、赤い顔と心臓の音に気づかれませんかように……。

「踊れない事は恥ずかしい事じゃない、何で嘘を吐くんだ？」

ヴィンセントにやさしく諭される。

「なんですって？」

嘘を、吐いた……？

誰が？

——あたしが？

「嘘なんか吐いてないわ！ 自分の秘密を、よく知りもしない人に言うなって……あなたがあたしに忠告したんでしよう！」

マルティナは踊りが得意ではない。

「だから言わなかっただけよ」

嘘を吐く事は騎士道に反する事。だから黙っていただけ。

それなのに……。

「嘘なんて、吐いてない！」

憤りを感じてヴィンセントを睨んでいたら、しばらくの沈黙の後

彼は腕を壁から離れた。

「じゃあ踊ろう、証明して」

「え……？」

ふいに両手を握られぐいと引かれた。勢い余ってヴィンセントの胸に飛び込むような体勢になってしまう。

無理矢理手を引かれ、2人は聞こえる音楽に合わせて月明かりの下で踊る。

ヴィンセントのリードはとても上手かった。彼の足を踏むことなくスムーズに移動できる。まるで城の騎士を相手に踊っていた時のような完璧なダンス。

マルティナが最後に踊ったのは城に住んでいた時だった。ダンスの心得のある貴族が相手だったので、足を出す位置もターンのタイミングも、誰と踊っても同じだった。

けれど、村での踊りは城のものとは少し違っていて、タイミングが合わずに足を踏んだり、ぶつかったりを繰り返した。そして若いマルティナは笑い物にされたのだった。

その時から自分の踊りは下手なんだと思っていた。

「完璧じゃないか、きつと問題は男側のエスコートだな」

曲が終わり、息を切らすマルティナにヴィンセントは涼しい顔をして微笑む。体力の差に少し悔しく思いながらも、マルティナは返事をせず、ただ息を整えていた。

ここまで完璧に踊れるとは思っていなかったが、そんな事は大した問題ではない。

マルティナはまだ怒りを静めたわけではなかった。ふーっと長く息を吐くと、同じようにゆっくりと吸う。

顔を上げ、ヴィンセントをきつと睨みつけると、思い切り振り上げた平手打ちをお見舞いした。

「ぐあっ！」

パン——と小気味いい音が、乾いた秋の夜空に響く。けれど祭りの盛り上がりが最高潮に達した広場では誰もその音に気付かない。

「いきなり何を——」

よろけるヴィンセントのその隙を見逃さず、マルティナは右手で拳を作ると、力の限り鳩尾みぞおちにめり込ませた。

金貨50枚の価値があるらしい傭兵は、何も言えずその場に崩れ落ちてひずく蹲る。

「謝罪を要求するわ！ あたしを、マルティナ」ローレンスを嘔吐き呼ばわりしたことに対してね！」

マルティナは声高々に宣言した。

名誉を傷つけられたならば、それなりの報復を——これも騎士の鉄の掟である。

「……すまなかった。嘘だと言った事は撤回する。許してくれるのなら、俺は何でもする」

しばらくすると、ヴィンセントは声を絞り出して言った——。

「まったく、驚いた……」

グインセントはマルティナの横にどさりと腰掛けると、まるでうわ言のように呟いた。マルティナに屈した事がそんなに悔しかったのだろうか。

「いい加減にしてよ、女々しいわよ!」

「色々と納得した。これじゃ誰も手出しできないわけだな……」

グインセントはそんなマルティナをちらりと見ながら、素材が良いのに勿体ない、などとわけのわからない事を呟いている。

「しかも、マルティナ」ローレンスねえ……」

つい頭に血が上ったマルティナは、先程フルネームを名乗ってしまっただの。

一生の不覚……。

今までは頭に血が上っても、引つ叩くか引つ掻くか、殴るか蹴るだけで済んでいたというのに。

「村の人には絶対言わないでよね!」

グインセントには一度、冗談だとしても脅されているのだ。

わかってるよ、と言いながら彼はくつくつと笑い続けていた。

焚き火はすでに勢いをなくし、軽く燻^{くすぶ}っているだけだった。

広場の主役は城から共に来た吟遊詩人。

彼がリユートを爪弾^{つまひ}きながら物語を唄い、皆が静かに聞き入っていた。女神と人間の恋物語が終わると、今度は王位を篡奪^{さんだつ}しようとした哀れな王子の物語……。

マルティナの耳にも透き通った歌声が風に乗って届く。昔、城でマルティナも皆と輪になって聴いた事があった。

懐かしい思い出だ。

「言っておくけど、あたし嘘は吐いていないから。黙ってるだけよ……城から来たあたしを貴族の娘じゃなくて使用人の娘なんだって皆が勝手に思いこんでるの」

自分の名誉の為にそれだけはきちんと伝えておく。

「マルティナは城に帰りたいと思ったことはないのか？ 自分の生まれ育った思い出の場所だろ？」

「そうね…… ヴィンセントは？ どこで生まれ育ったか知らないけど、あなたは家に帰りたい？」

「俺は——」

ヴィンセントは空を見上げた。真面目な顔で何かに想いを馳せている。懐かしい故郷を想っているのだろうか。

「俺の故郷は…… って、俺はマルティナに聞いたんだよ！」

「惜しかったわ、もう少しでヴィンセントの秘密を知れたのに」

質問に質問で返すのは良くないぞ、と少し焦った顔で言うヴィンセントを見たら嬉しくなって、マルティナはふふつと笑いだす。

「その笑顔は…… 反則だよなあ」

「どういう意味よ？ あたしは反則なんかしないわ、騎士道精神に反するもの！」

「論点がずれてるよ」

マルティナが文句を言おうとしたら、大きな音と共に花火が上がった。途端に彼女の関心は花火に移る。

夜空に咲く大輪の花は魔術でしか作れない。城に滞在している火の魔術師だろう。

「すごい、魔術ってすごいわ！」

楽しそうに空を見上げるマルティナの横顔を、ヴィンセントは眺めていた。

「あのね、あたしはこの村が好き。平和で時間の流れがのんびりしていて」

「俺もだ……。居心地が良すぎて、ずっとここに居たくなりそうだ」
そうでしょう、と言いながら笑顔で振り返るマルティナに、ヴィンセントもつられて笑ってしまう。

マルティナが花火に視線を戻すと、ヴィンセントはずっと笑顔を消した。

「ローレンス……か」

小さく囁いたその声は、本人に届く事なく秋風が連れ去っていった――。

よく晴れた朝。マルティナは館内の2階へと続く階段を掃除していた。村から雇われた農民は屋敷の掃除などの雑用が主な仕事だ。領主の屋敷は要塞を思わせるような城壁はないものの、しっかりとした石造りの建物だった。非常の際でも籠城には向かないが、こんな田舎で今までに非常時はない。

城壁がないお陰で窓から外を見れば、遠くの景色が見渡せた。少し高いところから見渡す緑の草原と小さく見える村。この階段の間にある窓はマルティナのお気に入りの場所なのだ。

「トウララ……」

周囲に誰もいないのをいい事に、つつい鼻歌交じりで一段ずつ丁寧に階段を掃く。

ふと話し声が聞こえて外を覗けば、アンとジェシカがおしゃべりをしながら井戸の水を汲み上げていた。話の内容はよく聞こえないが、どうやら騎士の中で誰が一番かっこいいか、という話題のようだった。その会話の中からライナス、という単語を聞き取り、マルティナはつつい眉間に皺を寄せる。

「どこがいいのよ……」

独り呟き、箒を握る手に力を込めた。

きやつきやつと盛り上がる2人は、そのうち城から同行した使用人頭に見咎められて怒られている。

それを見てくすぐすと笑っていると階上から視線を感じた。怒られる、と咄嗟に感じたマルティナは恐る恐る見上げる。

「ライナス……」

そこにいたのは、3年前に見習いから騎士へと昇格した幼馴染のライナスだった。

彼とは父の元でいつも一緒に鍛錬や稽古をした仲だった。マルティナには勝てない、と誰もが尻ごみしていても、ライナスだけは毎

回勝負を挑み、そして負け続けた。

8年前のあの日——マルティナが城を去ったあの日、ライナスはまた勝負を挑んでいつものように負けた。

「いつか必ず、俺が勝つてやる！ だから城を出ても鍛錬を怠るなよ！」

そんなライナスの言葉にマルティナは随分と救われた。城を出ても、村に住む事になっても友情は変わらないのだと思っていた。

彼が騎士へ昇進するまでは……。

ライナスの肩まで伸びたこげ茶色の髪は、騎士になった頃から短く刈り込んでいる。彼が言うには、鎧を着る時に邪魔だからだそう。そんなものの自慢にしか聞こえない。

簡素なシャツとブーツ、腰に剣を差していない姿から、今は休憩中だろうか。灰色の瞳は不安そうで、何か言いたげだ。

何を言いたいかは、マルティナにはだいたい想像がついた。

しばらく見つめ合い沈黙が流れる。その静寂を破ったのはマルティナのため息だった。

「何か用？」

マルティナは素っ気なく問う。

「マルティナ、話があ——」

「あたしはないけど、何よ？」

「その、謝りたくて……」

3年前の、あの思い出したくもない出来事を？

「何を謝る必要があるの？ あたしが負けた事？ それともライナスが勝ったこと？」

ついイライラしてしまい、マルティナは声を荒げる。

そんなマルティナに睨まれたライナスは目をそらした。

「もしあたしが……泣いたことを言っているのなら、あたしはライナスを絶対に許さないわ！」

「そうじゃない。俺は……」

マルティナは過去に2度だけ泣いたことがある。1度目は父が死

んだ時、2度目は——ライナスに初めて負けた時……。

——3年前。

ライナスが騎士になったと嬉しそうに屋敷から村へと駆けてきた。2人が15歳の頃だった。

「ティナ、もう一度勝負を挑みたい！」

剣を2本持つてきたライナスはそう言ってマルティナに勝負を挑んだ。

「いいわ、あたしの100勝目を、ライナスの騎士昇進祝いにしてあげる」

一度もマルティナに勝ったことがないライナスは狩りに来た折、5年ぶりにマルティナに勝負を挑んだ。現時点でマルティナの99勝0敗である。

この5年間、騎士見習いとして日々精進し、体格も子供の頃と変わったライナスと、畑仕事や薪割りで身体を鍛えてきたわりに、胸や尻にだけ肉が付き始めたマルティナとの勝敗は決まっていたも同然だった。

そして想像通り、ライナスはいとも簡単に勝利を収めた。

「ティナは女なんだから、いつか負けるって決まってたんだ」

ライナスはいつもの調子でマルティナに軽口を叩いたつもりだった。

「勝つたら伝えようと思っていた事がある……マルティナ、俺はお前が好——」

「もう一度勝負よ！」

ライナスの一世一代の告白は、むきになったマルティナの言葉にかき消された。

「勝負はもうついただろ、また負けたいのか？」

そして、格好が付かないと焦ったライナスは、2度も言うてはならない単語を口にした。彼がしまったと気付いた時、マルティナの頬はすでに濡れていた。

騎士として鍛錬に明け暮れたライナスは、そんなマルティナをどう扱っていいのかわからず、その場から走り去ったのだ――。

それから3年の月日が経った。

ライナスの前で泣いてしまった事が悔しくて、親友だと思っていた彼がそんな風に思っていた事に憤りを感じて、マルティナは彼を避け続ける事しかできなかった。

例えライナスとすれ違っても、話しかけられても、マルティナは何も答えなかった。気配を察すれば無意識に逃げていた。

この時までには……。

「マルティナ、俺は3年前ひどい事を言ってしまった。ずっと謝りたかったんだ」

「へえ、あたしは憶えてないけど、なんて言っただの？」

目を細めてじつと睨み、嫌味を言えばライナスはまた黙ってしまった。これくらいの意地悪なら多少は許されるだろう。

マルティナは何も言わないライナスの存在を意識しながら掃除を始めた。しばらくすれば彼は消える。

いつものように……。

けれど今回は違っていた。ライナスは階段を降りるとマルティナの横へ立つ。

「マルティナ……」

あの時から、ライナスはマルティナを『ティナ』と呼ばなくなった。幼少期のあだ名は父が死んだ今、ライナスの他にジャスティンしか呼ぶ者はいなかったのだが。

あだ名で呼ばなくなったライナスは、きっと自分の事を見下しているのだらうとマルティナは感じている。まるで村の男友達と同じだ。

彼らはどんどんマルティナを追い抜いていった。ライナスだけは違うと思っていたのに、そうではなかったらしい。

「すまなかった。城を出てからもずっと鍛錬を怠らなかったマルテ

イナに、俺は勝った事が嬉しくて最低の言葉を投げってしまった。一度しか勝っていないくせに、自分でもおこがましいと思う」

ちらりとライナスを見れば、彼は真面目な顔をしている。

「本当にすまなかった」

ライナスはそう言うのと頭を下げた。

予期せぬ出来事に驚いたマルティナは箒を持ったまま硬直する。ずっと黙っていればライナスもその格好のまま動かない。もしも誰かが通りかかれば、村娘に騎士が頭を下げているという不名誉な姿を目撃されてしまう。

そしてタイミングが悪く、石の廊下をカツンカツンと近づいてくる足音が聞こえた。

これでライナスは頭を上げるだろう。この場をどうしていいのかわからなかったマルティナは、少しほっとしながらライナスが動くのを待った。けれど彼は一向に頭を上げようとしなない。

ライナスは、マルティナの許しを待っているのだ。

「わかったわ、もういいから……。誰かが来てその姿を見られたら、困るのはライナスでしょう？」

「許すと言ってくれ」

それまでは詫び続ける、と言うライナスの姿と、だんだんと近づいてくる足音にマルティナは焦る。

「許すわ、許すから！顔を上げて、ライナス」

その言葉を聞いてようやくとライナスは顔を上げた。心なしかその表情は晴れ晴れとしている。対するマルティナは慌てた様子で階段を上ろうとして、スカートの裾を踏んだ。

「きゃっ」

上段から足を踏み外してバランスを崩したマルティナは転げ落ちそうになるが、すんでの所でライナスに抱きかかえられた。

近づいてきた足音はもう聞こえない。角の部屋へ消えたようだった。

「マルティナ、階段ではふざけるな。落ちたらどうするんだ？」

安心してほつと息を吐くのと同時に、耳元でライナスの声が響いて驚く。久しぶりに近くで聞いたライナスの声は低く、マルティナの身体を通して反響して聞こえた。

見上げれば頭一つ分背の高いライナスの顔が近くにある。

3年前と比べれば、彼はまた成長して逞しくなっていた。

「どうしてティナって呼ばないの？ 昔みたいに……」

思い出したら尋ねずにはいられなかった。彼はあの勝負で勝った時から、ティナ、と一度も呼んでいない。

その質問に意表を突かれたライナスは驚いて目を見開いた。

「その……お互い対等な立場で勝負を挑みたくて。もしも傷つけたのならそれに対してもきちんと詫びる」

目を逸らさずにそう言われれば、真実なのだとマルティナは実感した。

「そついうことだったの。てつきり自分が騎士になったからって、あたしの事を見下してると思ったの。あたしが女だからって……違うのね？」

「ち、違う！ 断じて違う！」

今度は少し目が泳いだ気がしたけれど、力強い瞳に見つめられればライナスは嘘を言っていないのだろぅと思った。

「じゃあ、これからも仲良くしてくれる？ ライナスにはティナって呼んでほしいの」

子供っぽいお願いをする事が少し恥ずかしくて、マルティナは伏せ目がちに言うが、ライナスは何も答えてくれない。

「別に、無理にとは言わないわ……」

やっぱり言わなければよかったかもしれない。顔を上げるのが恥ずかしくて上目づかいでちらりと見れば、ライナスは心なしに顔を赤くして口をぽかんと開けていた。

その姿が何を意味しているのか解らず、マルティナは小首をかしげて見上げた。

「ライナス……？」

熱でもあるの？ と続けようとして、ライナスはまだマルティナを抱いていた事に気付いたらしく、ものすごい勢いで離れた。

「あ、ああ、わかった、ティナ。じゃあまた……」

ライナスは焦った様子で階段を下りはじめる。そして何段目かで踏み外して階下まで落ちた。

「やだ、ライナス大丈夫？」

手を貸そうと階段を下り始めたマルティナを、ライナスは片手を出して静止させると振り返りもせず去っていった――。

「本当に大丈夫かしら？」

こうしてマルティナとライナスは、3年ぶりに友情を復活させた。

「ん〜」

マルティナは両腕を天高く上げ背伸びした。

村から雇われた使用人は仕事が終われば家に帰る。夕日の眩しさに目を細めながら帰路につこうとした時だった。

「マルティナ！」

名前を呼ばれ、キョロキョロと声の主を探していると、夕日を背にした木の下からヴィンセントが立ち上がった。

欠伸をしながらマルティナに近づくと、気持ち良すぎて寝てしまった、などと呟く。

「こんな所まで来て何してるの？」

屋敷の敷地内で寝こけるとは、不審者として捕まったらどうするのだろうか。マルティナは少々呆れてしまう。

「マルティナを迎えに来たんだ」

「一人で帰れるんだけど？」

マルティナは途端に不機嫌になった。ここから村までは丘を下る一本道だ。迎えも何も危険はない。

「あ、いや……。本当はマルティナのついでで貴族の誰かを紹介してもらおうと思った」

苦笑いのヴィンセントは取り繕うように言う。本当はマルティナを迎えにきたのだが、ヴィンセントはあたかもそれが目的だと言うように、ついでの要件を口にした。

「だったらそう言いなさいよ。でも誰かって言われても……」

幼馴染のライナスやジャスティンに言えば騎士団長か領主様に紹介して貰えるかもしれないが……。

先程仲直りをしたライナスはおるか、領主の息子であり次期領主のジャスティンにだって簡単に頼める話ではない。城にいた頃ならいざ知らず、マルティナは今やただの村娘だ。身分相応というもの

がある。

ヴィンセントに城で働く事を勧めたはいいが、方法までは考えていなかった。

マルティナは腕を組んでしばし考える。

「ティナ！」

馬の嘶き声が聞こえ、振り返る前に声をかけられた。

「ジャスティン……」

そこには純白の愛馬を連れたジャスティンが佇んでいた。遠乗りから戻ったのだろうか、金色の長い髪は少し乱れて跳ねているが、夕日を浴びた金髪はとても綺麗で美しい。気品の感じられる乗馬用の白いシャツ、飾りの付いたベルトやブーツは領主の息子らしく上等なものだ。

翠色の双眸は笑みを湛えてマルティナだけを見つめている。まるで、そこにヴィンセントがいないかのように……。

「1年振りだね、元気だった？」

「ええ、ジャスティンも元気そうね」

につこり笑うジャスティンにつられてマルティナも笑顔で答える。屋敷の中ではジャスティンとすれ違っても、目を合わせて笑いかけてくれる事はあるが、話しかけられる事はない。それはマルティナもジャスティンもお互いの身分を承知しているからだ。

次期領主が村娘に気軽に話しかける事などあつてはならないし、逆は絶対に有り得ない。

けれど、昔は城で一緒に育ったもう一人の幼馴染だ。人目もなく2人きりになれば会話もするし、ジャスティンは昔と変わらない笑顔は今もマルティナに向けてくれる。

彼女がまだ城にいて、父が騎士団長だった頃、ジャスティンも父から指導を受けていた。2つ年上の彼は小さなマルティナにやさしく接し、彼女が剣を持つようになれば厳しく指導をしてくれた。

マルティナや他の見習い騎士達に対しても身分関係なく接するジャスティンに、マルティナは自然と恋に落ちた。

いつかジャスティンの横に並んで立つ事を夢見た。彼の背中を守る為に剣を振いたかった。

しかし、それは叶わぬ願いとなり、マルティナの初恋は花びらのように儚く散った――。

「ところで、そこに突っ立っているのはティナの知り合い？」

ジャスティンは、マルティナの後ろに立つヴィンセントに初めて気付いたかのように尋ねた。

「あ、そうそう忘れてたわ。彼はヴィンセント、傭兵なの」

マルティナはヴィンセントにも同じようにジャスティンを紹介する。

ヴィンセントは小さな声で、忘れてたのかよ、と愚痴っていたが、マルティナは聞こえないふりをした。

「あのね、ヴィンセントは仕事を探しているの。よかったらお城で雇ってくれないかしら？　――ほら、あなたからもお願いしなさいよ！」

まだブツブツと文句を言い続けるヴィンセントにマルティナは振り返る。

「ああ、雇ってくれると助かるんだが……」

「それが人にモノを頼む態度なのっ？」

マルティナが背中を見せている間、ジャスティンはヴィンセントに対して鋭い視線を向けていた。

それに気付いたヴィンセントは気にいらなという表情をするが、即座にマルティナに怒られてしまうのだった。

「ティナ、申し訳ないけど、僕にはそんな権利はないんだ。それに雇うとしてもこの誰かもわからない傭兵を簡単には雇えないよ」

もしも敵の間者だとすれば、内側から陥落させられる事もある。

ジャスティンはそれを危惧していた。

この国には王がいても領主同士の諍いには介入してこないのが現状だった。領主同士が領地を奪い合ったとしても、勝った者が国に

賠償金を支払えば許された。決められた税金を王国に支払い、王領にさえ手出ししなければいいのだ。

「そ、そうよね。無理なお願いをしてごめんなさい……」

そう説明されれば正当な理由だと気付かされる。

「でも、ティナの知り合いなら、僕から父に紹介してみるよ」

しゅんとしてしまったマルティナにジャスティンは元気づけるように言った。

「そんな、ダメよジャスティン！」

大丈夫だよ、と微笑むジャスティンにヴィンセントの機嫌は悪くなる一方だ。

「大丈夫なら最初からそう言えっつーの！」

「ちよつとヴィンセント、なんて事言うのよ！」

マルティナが怒ればジャスティンは、相変わらず元気だね、と彼女の頭を撫でる。

「ジャスティン、あたしも子供じゃないんだから、そういうのは止めてって言ったじゃない！」

「ごめんね、マルティナがかわいくて」

そう言えばマルティナは頬を膨らませて怒るのを知っていて、ジャスティンはわざとからかった。いつもの調子を取り戻したマルティナに、彼は目を細めてやさしそうな笑顔を向ける。

「またもやヴィンセントは蚊帳の外だった……」。

「ああそうか、マルティナだからティナね……。俺もそう呼ぼうかな？」

自分がここにいる事を主張するかのように、ヴィンセントは関係のない事を口走ってみるが、

「絶対ダメ！」

ジャスティンが何かを言う前にマルティナが大声を出す。

「何でだよ？」

「とにかく、ダメなの！」

マルティナとヴィンセントを交互に見たジャスティンは、ヴィン

セントにだけ意地の悪い笑みを浮かべて見せた。それは先程からマルティナには一切見せていない表情だ。

それに気付いたヴィンセントは、なおも不機嫌な顔になるが、マルティナはそれを見咎めて彼に小言を言うのだった。

「ティナ、今日はもう遅いからまた明日彼を連れておいで。帰り道に気を付けるんだよ」

「ご心配なく、あたしは大丈夫よ！ ジャスティンこそお供を連れずに遠乗りなんか行ったら危険なんだからね！」

マルティナは可愛げのない返事を返したけれど、ジャスティンはまるで愛の言葉を囁かれたかのようにマルティナを見つめ返すだけだった……。

じゃあね、と手を振るマルティナと、睨みつけるヴィンセントが丘を下り始める。

「ライナス、聞いていた？」

振り返らずに呟くジャスティンの背後から、そっとライナスが現れた。

「あいつは何者だ？」

「西の方で傭兵として働いていたそうだ。彼は今、ティナの家に世話になってるんだって」

はい、と手綱を渡しながらライナスをちらりと見れば、想像通りの彼のくやしそうな顔が面白くてジャスティンは満足する。

「今までティナは自分に言い寄る男をちゃんと排除してたから安心していただけだなあ……。今回はティナだけじゃ手ごわそうだね」

「ティナが選んだのなら……。いいんじゃないのか？」

ライナスは暗い声で呟いた。

「弱気になっちゃダメだよライナス！ どんな事をしてでも城で引き取らないと……。村に置いておいたら危険だ、ねえクリスティーヌ？」

ジャスティンはぽんぽんと愛馬の首を叩く。

遠くのマルティナが振り返り、ライナス！ と叫んだ。表情は見えないが、両手を伸ばして大きく手を振っているのが確認できる。

マルティナに手を振り返すライナスを横目に、ジャスティンは思いついたかのようにクスクスと笑いだした。

「へえ、仲直りできたんだ？」

「盗み聞きしていたくせに、何を言っているんだ」

「心外だなあ、偶然通りかかったただだよ。いい雰囲気だったし、そのまま告白しちゃえば良かったのに……」

「そ、そんなこと——」

思い出したかのように顔を赤くしたライナスは、厩へ行くと言ってジャスティンの馬を連れてその場を後にした。

「それに、僕が一番嫌いなタイプなんだ……」

小さくなったマルティナの背中を眺めながら、笑顔を消したジャスティンは冷たい声で囁いた。

——魔術には其々属性それぞれがあり、生まれながらに持っている才能、即ち魔力があれば使う事が出来る。

まず、魔術を学ぶにあたって、6種類の属性に分ける事にしよう。
火、水、土、風、光、闇の6種類だ。

炎を操り、幻惑を見せる火の魔術。雨を降らせ、傷を癒す水の魔術。植物を育て、大地を支配する土の魔術。疾風を起こし、音を響かせる風の魔術。落雷を呼び、閃光を走らせる光の魔術。人を惑わす魅惑の力と予知夢を見る闇の魔術。

おのおの 各々の持つ魔力によって、出来得る魔術にも違いがある。例えば、炎を操る事は出来ないが、幻惑を見せる事が出来る者も火の魔術師に分類される。属性も生まれながらに持っている能力であり、自ら選ぶことは出来ない。

強い魔力を持てば他者を攻撃する事も可能となるが、本書は戦や争いの為ではなく、生活をより豊かにする事を推奨する為に書かれた本だという事を念頭に置いてほしい。

ジャン・アウローラ・ファティマ著 『魔術の書』より抜粋

「じゃあ、あの花火も幻惑なの？」

「どうやっているのかは解らないけど、投げた火の玉に多少は幻惑の魔術もかけているんじゃないか？」

夕食も終わり、一息ついた頃、ヴィンセントは革の鎧の手入れをしながら魔術についての話をしてくれていた。マルティナは興味津々だ。

「ヴィンセントは今までにどんな魔術を見た事があるの？」

「んー、土とか闇とか……光くらいかなあ」

すごいわ！　と興奮するマルティナに、ヴィンセントも少し自慢げで楽しそうだ。

「女の魔術師は見たことある？　あまりいないって聞いたわ」

「女の魔術師——魔女が現れたと聞けば、国を挙げて奪い合う事もあるくらいだ。滅多にいない」

魔女は魔術師以上の魔力を持ち、高確率で子孫にも同等かそれ以上の魔力が受け継がれる。そして魔女の見た目は何十年と歳を重ねていても若く美しい。

一族繁栄のため、権力を誇示するため、国を豊かにするため、他国を侵略するため……理由はそれぞれあるが、多くの権力者達は、己の欲望のためにしばしば魔女を欲する。

「魔力も男ばかりが持つのよね、そんなのってずるいわ」

「けど、魔女は魔術師よりも強いんだぞ」

「あら、そうなの？」

女の方が強いと聞けば、マルティナは嬉しくなるのだった。

「ヴィンセントがお城に仕官に行ってしまったたら寂しくなるわねえ」
そんな2人を眺めながら、リスおばさんが呟くと、ジョンおじさんも楽しげに笑った。

「やだ、全然寂しくなんてならないわっ！　ヴィンセントがいなくなったら、リリーさんがまたお見合い話を持つてくるだけよ」

マルティナは間髪入れずに返す。

「ひどい事を言うな。嘘でもいいから寂しいとか言ってくれよ」

ヴィンセントはわざとらしくがっかりして見せているけれど、革の鎧を磨く手は休めない。

この村が好きだって言ったくせに、城に行けるとわかれば嬉々として準備をするのね。

マルティナはもう二度と城門の中へは入れない。この村は好きだけれど、父と共に育った城だって大事な故郷なのだ。

羨ましいような、もしかしたら寂しいのかもしれないような、そんな感情が入り混じって複雑な気持ちになる。

「どうした？」

じつとヴィンセントの手の動きを見てしまっていたマルティナにヴィンセントは声をかけた。

「な、なんでもないわ！ 別に、羨ましくなんてないんだから！」

寂しいかどうか聞きたかったのに、と苦笑いするヴィンセントやおじさんとおばさんの醸し出すほほえましい雰囲気じつとしていられず、マルティナは席を立った。

「あたし、薪を割ってくる」

もうそろそろ無くなりそうだったはず……。

「まだあるよ」

暖炉の前で耕具の手入れをしていたおじさんが顔を上げてマルティナに言うけれど、そう言って聞く娘ではない事は重々承知している。

彼女はランタンを手にも外へ出て行った。

「マルティナは器量がいいから、結婚の話も沢山しているんじゃない？」

閉まったばかりの扉を眺めながら、ヴィンセントは呟いた。

「マルティナがその気にはならないからね」

おじさんは苦笑いでそう言うが、おかしそうにくくつと笑っている。

「それに、ちょっと活発な娘だからねえ」

おばさんも何かを思い出したように笑顔で答えた。

彼らは自分の娘のようにマルティナを愛している。出会ったばかりのヴィンセントが見ていてもそう感じられた。

幸せな結婚をしてほしいけれど強制はしない。すべて彼女の望むままに——そう思っているのだろう。

「いい娘だから皆がほつとかない、村の若者を見ていればわかりますよ」

マルティナを想えばふつと笑顔がこぼれてしまい、ヴィンセントはそんな自分に少々面食らった。

「そうだわ、ヴィンセントがここに残ってマルティナと一緒にいればいいわ。きつとあの子もあなたの事を気に入っているはずよ」

おばさんは冗談なのか本気なのかわからない口調だ。

「俺もこの村は気に入りました。平和でのどかだ。それでいて一日が短い。だけど……」

ここに来てもう3週間近くなる。そろそろ移動した方がいいだろう。

追われる身であるヴィンセントが一つの場所に長く留まれば、それだけ周りの人間に危険が及ぶ。この村を関係のない争いに巻き込んでしまう。

ここはとても居心地が良すぎて、自分の置かれている立場をつい忘れてしまうのだ。

平和な農村での暮らしなど、今の自分には許されない。

でも、もしも望まれるのなら、ここに居られるのなら――。

「マルティナが、それを望んでくれるのなら、俺は――」

先ほど閉じた扉が思い切り開き、ヴィンセントの言葉が遮られた。「薪を全部割ったのは誰！」

マルティナは斧を手に憤慨した様子で叫ぶ。

「あれをすべて割ったのかい？」

おじさんとおばさんは驚いてヴィンセントを凝視した。

実は昼間、夕食時に使うから少し割っておいてほしい、と頼まれたヴィンセントが全て割ってしまったのだ。

仕事を取られた、とじつとヴィンセントを睨むマルティナはすっかり鬼の形相だ。

「はは、はははは……」

皆に見つめられ、ヴィンセントはただ笑っしかなかった。

翌日、まだ怒りを抑えないマルティナと、今日も晴れたわね、などと呑気にも天気の話題をするおじさんとおばさんの横で、空気が重いと感じているのはヴィンセントだけだった。

負けず嫌いのマルティナが、大量の薪をたった一日ですべて割ってしまったヴィンセントに憤りを感じないわけがない。

「いつてきます！」

おじさんとおばさんにそう告げてマルティナは仕事へ向かった。まだ食事中だったヴィンセントはパンを頬張りながら急いで後を追う。

「マルティナ、悪かったって」

前を歩くマルティナに声をかけた。

「何が悪いのよ！ 頼まれて割ったんでしょ？ それも、薪を、すべて！」

マルティナの足が速くなった。最後の台詞を強調して言う辺り、相当怒っている証拠なのだろう。

「いや、つい……。ほら、マルティナの割った薪は均等に割れてたんだ。俺にもできると思ったけど、やってみたら結構不揃いで……。ヴィンセントは困った様子で後頭部を掻きながら、さくさくと先を行くマルティナに声をかける。

「ついムキになって、気付いたらすべて割ってたみたいだ。あれは難しいな、マルティナには勝てないよ、ほんと……。」

マルティナは振り返らない。けれど少し歩幅が緩んだ。

「薪割りはおあたしの稽古だったのよ。ヴィンセントには必要ないじゃない……。」

マルティナは小さな声で呟いた。そう言えば、彼女は剣を振れない代わりに斧や鍬で腕を磨いているのだと言っていた事を思い出す。「じゃあ、代わりに俺が相手しよう、それでも俺は現役の傭兵だぞ」マルティナの横を並んで歩くと、彼女はちらりと横目で見てきた。しばし思案顔の後、

「とおりやー！」

瞬時にマルティナは拳を振り上げる。

ヴィンセントはそれを手の平で受けた。ちなみに、この前は油断したお陰で1発受けている……。

「今夜、帰ったら相手してくれる？」

首を傾げてかわいらしく微笑んではいるが、マルティナは隙あらばまた攻撃してくる構えだった。

まったくもって油断ならない……。

「よし、今夜だな。約束だ！」

「約束ね！」

こうして機嫌を直したマルティナは、足取りも軽やかに丘を登り始めた。

屋敷の前に人が立っているのが見える。格好からしてジャスティンだろう。それに気付くと、マルティナは顔を綻ほころばせて大きく手を振り始めた。

「マルティナはジャスティンの事が好きなんだな」

昨日も感じたが、ヴィンセントはそう思ったら聞かずにはいられなかった。

「な、何言ってるの？ そんなはずないでしょう！」

硬直してみるうちに顔を赤くしたマルティナの反応を見て、ヴィンセントは、やはりそうなのかと納得した。

「嘘は吐かないんじゃないのか？」

「吐いてないわよ！」

マルティナはそれきり下を向いて黙ってしまった。少しいじめすぎたかもしれない、と声をかけようとした所で彼女は顔を向けた。

「……初恋だったの。いつか、父のような立派な騎士になって、ジャスティンに剣の忠誠を立てたいと思っていたわ。彼はあたしが守るんだって……。でも終わった恋よ！ もう忘れたわ」

「……それ、恋じゃなくて忠誠心じゃないのか？」

ヴィンセントは少し呆れて問う。

「何？」

「あ、いや……何でもない」

忘れたと言っているのなら、今さら思い出させなくてもいいのかも知れない。

それとも、少し卑怯だろうか――。

雲ひとつない青い空を見上げる。マルティナの瞳と同じ色の空だ。

「そうだ、もう一つ、マルティナに勝てない事がある」

ヴィンセントは思いだしたかのように呟く。

振り返って問うマルティナの耳元に内緒話をするように近づくと、

ヴィンセントはそっと囁いた。

「口喧嘩も勝てそうにない、さっきは仲直りができて良かった」

「どういう意味よ！」

ころころと表情が変わって面白い。こついう所は年頃の普通の娘と同じだった。

屋敷の玄関前には約束通りジャスティンが待っていた。おはようと挨拶をするとジャスティンも笑顔で返してくれる。

彼の笑顔は不思議なもので、見ているとこちらもつい微笑んでしまうのだ。

思い返せば、ジャスティンが怒る姿をマルティナは一度も見たことがなかった。優しい領主はいつか他者に付け入られてしまう……。少し心配になり、あとでライナスに注意して見ておくよう伝えてなければ！ とかたく心に決めた。

それにしても、今朝は一段とにこにこしている。

「ティナ、後ろを向いて？」

「どうして？」

疑問に思いながらもマルティナは言うとおりにジャスティンに背中を向ける。

そんなマルティナの後頭部を愛おしそうに、優しい瞳で見つめるジャスティンの目には、またもやヴィンセントは映っていない。

「朝から勘弁してくれよ……」

周囲が何も見えていない恋人同士のような、そんな甘すぎる雰囲気のにまれて、ヴィンセントは2、3歩ほど後ずさった。

「サラサラで綺麗だね」

ジャスティンは手櫛でそつとマルティナの長い黒髪を梳く。

「ジャスティンの金髪の方が綺麗じゃない。嫌味にしか聞こえないわ！」

「ほら、前を向いたまま。じつとする！」

振り返ろうとするマルティナの頭を両手で掴み、ジャスティンは無言を言わず前を向かせると、優しい手つきで耳横の髪をすくい何かで結び始めた。

前を向かされているマルティナは、何をされているのかわからない。

「いいよ、こっちを向いて」

肩をつかまれ強制的に半回転すると、ジャスティンの満面の笑顔に迎えられた。

「ティナは髪を結った方がかわいいよ」

そつと頭に手を伸ばせば、リボンのようなものが髪に編み込まれていた。横の毛と一緒に纏められ、背中に流れている。

「い、いらない！」

ジャスティンがくれるものは高価なものの確率が高い。お返しもできないマルティナが簡単に貰うていいものではないのだ。

リボンを解ほどこうとすれば、ジャスティンにそつと手を握られた。

「頼んでおいたものが出来上がったんだけど、長さが足りなかったんだ。中途半端じゃ何にも使えないし、ただ捨てるよりも誰かの髪を飾った方がいいでしょ？」

「捨てるって言うなら……貰うけど」

僕とお揃いだよ、と言うジャスティンはブルーの光沢のあるリボンで金色の髪を緩く結っている。素材がわからない辺りが高級そうだ。

「でも、あたしジャスティンからは前にもブーツを貰ったわ……」

あまり物を貰うのは好きではない。それに見合うお返しが無ければティナには何もできないからだ。

「気にすることはない。あの時は、元と言えば靴職人がいけないんだから」

マルティナが現在愛用しているブーツは、靴職人がジャスティンの足のサイズを測り間違えて小さめに作ってしまったものらしい。

偶然にもマルティナにぴったりだったので、内緒だよ、とジャスティンから譲り受けたのである。

スカートから覗くブーツのつま先をじつと見つめる。欲しかった物が手に入れば嬉しい。だから何かしらのお返しをしたいのに、マ

ルティナはジャステインの望むものを何も用意できない。

傍にいて彼の背中を守る事さえできない――。

ジャステインは手の甲でそっとマルティナの頬を撫ぜた。

顔を上げれば、彼はいつものように微笑んでいる。けれど、どこか寂しげに見えた。

「僕には、これくらいしかできないから……」

「充分だわ。靴職人が靴の製作を失敗したなんて噂が広まったら大変なもの」

最初からマルティナ用だったという事にしておけば、きっと靴を作った人の名誉を守れるのだろう。

秘密は守るわ、と伝えればジャステインは切なげな笑みを深める。次期領主である彼が、使用人の事までも気にするとは……。やっぱりジャステインは優しすぎるわ、とマルティナは心の中で思った。

「遅いぞジャステイン、伯爵がお待ちだ」

玄関のドアが開き、ライナスがイライラした面持ちで顔を覗かせた。

「あーあー煩い迎えが来てしまった。僕はそろそろ父上に彼を紹介しに行かないと!」

ヴィンセントを探したら、彼は少し離れた場所で草地を蹴っている。

一体何をやっているのだろうか。

「ヴィンセント?」

「うん? なんだ、寸劇は終わったのか」

劇を演じた覚えはないのだけれども……。

初対面のヴィンセントとライナスをお互い紹介した後で、マルティナは先ほど憂慮した事を伝えなければと思い出す。いずれジャステインの右腕となり彼を補佐するライナスにしか頼めない大切な事だ。

「ライナス、後で大事な話があるの。時間作れる?」

「だ、大事な話？　あ、え？　ああ、わかつ——」

「見て見てライナス！　ティナにリボンを付けたんだ。かわいいって言ってあげて？」

ライナスが返事をする前にジャスティンが割り込む。

「いいじゃないか、似合うぞー」

木に背中を預けて暇そうに見ていたヴィンセントまでもが冷やかし始めた。

「もう、そういうのやめてったら！」

面と向かって言われれば、恥ずかしいものがある。

「か、かわ——……ティナなんかについたら、リボンが勿体無いだろ！」

面と向かって言われれば……腹立たしいにも程がある。

「そうよね、そうでしょうとも！　ジャスティンには似合っても、あたしなんかには似合わないわよね！」

蝶々結びの先を引っ張ればリボンはらりと解けた。ほど

「やっぱり返すわ」

受け取りそうもないジャスティンの手に無理矢理リボンを押し付ける。

「ライナス……僕からも大事な話があるから、あとで部屋に来てくれるかな？」

「……了解した」

なんとなくジャスティンのワントーン低くなった声音と、なんとなく顔色の悪いライナスが気になるけれど、これ以上伯爵様を待たせるわけにはいかない。

「じゃあね、ヴィンセント、伯爵様にちゃんといいところ見せるのよ！」

「ああ、なんとかなるさ」

マルティナは最後に、磨いた革の鎧を身に付けて腰に剣を差すヴィンセントを上から下まで眺めてみた。

特に問題なし！

「あら？」

ヴィンセントの鎧の肩口に、マルティナの髪の毛が絡まっている事に気付いた。村に来てからずっと着用していなかった鎧……。

「あの時のじゃない！　ちよつとまってヴィンセント、金具のところに髪の毛が付いてるわ！」

ヴィンセントも肩の金具を見るが、面倒臭そうに手を振る。

「いいよ別にこのままで」

「だめ、こんなのみつともないわ！」

じつとしてよね、と忠告すると金具から自分の髪の毛を外し始めた。伯爵にマルティナの名前は伝わらないだろうが、身なりはきちんとして欲しい。

「はい、取れたわ」

ふーっと飛ばすと、ヴィンセントは風に乗って消えた髪を名残惜しそうに目で追いかけた。

「なんだか女神の加護を失った気分だ。雇ってもらえなかったらマルティナが責任取って俺を雇えよ」

「何よそれっ！」

マルティナが怒ればヴィンセントはくっくつと笑い出す。

こんな事しか言えない彼は、果たしてオールブライト伯爵に気に入られるのだろうか。

ジャスティン、ライナスと屋敷の奥へ消えていくヴィンセントの背中を眺めながら、マルティナは彼に対してもいらぬ心配をしてしまつのであつた――。

「まったく、折角の誕生日プレゼントだったのに、見事に本人に突き返されてしまったよ！」

誰に言うともなく、ジャスティンはわざとらしく大きなため息をついて肩をすくめた。

先頭を歩く彼の後を、ひどく落ち込んでいるライナスが続く。

「ただでさえひと月遅れの贈り物だったんだけど。ねえ、ライナス？」

話が聞こえていないのか、茫然自失のライナスは無反応だった。ちつと舌打ちをしたジャスティンは、怒りの矛先をヴィンセントに向ける。

「ところでヴィンセントって言ったっけ？ ティナとは随分仲が良いやうだね？」

「それほどでもないさ、マルティナは俺がティナと呼ぶことを許してくれない。まあ、それ以外は許してくれるけど……」

「あつそ！」

ヴィンセントは挑発するように答えるが、ジャスティンはたいして気にしていないようなそぶりを見せた。

「どうして鎧に髪が引っ掛かった？ “あの時”って何？」

いや、やはり気にしているのかもしれない。

「野暮な事を聞くなよ。ここに、髪が引っ掛かるような事をしていただけだ。今度からはそうならないように先に鎧を脱いでおくよ」
ヴィンセントはにやりと笑う。

「ふうん……」

「俺からも質問して良いか？」

ジャスティンは冷笑を浮かべて振り返った。肯定、ということだろうか。

あんたはマルティナには嘘ばかりだ。あんな回りくどい手段を使わないと贈り物もできないのか？ 幼馴染が聞いて呆れるな」

「……………そうだね」

ジャスティンは射るような視線をヴィンセントへ投げた。

「もしも父上が反対しても、君を我が城へ迎えたいと切実に思うよ。きつとマルティナは、彼のこんな表情をまだ知らないのだろう。」

「愛しのティナに悪い虫がつかないといいな」

「虫は僕が全部すり潰すから安心してくれていい。それから、君はティナと呼ぶことを許されてはいないよ」

底冷えする石造りの廊下で、ジャスティンは静かに囁いた。

オールブライト伯爵との謁見は、少し会話をただけで呆気なく終了した。

明朝の狩りで実力を見せろとの事だった。それで使える人間かどうかを判断するのだから。実力主義な所は誉められるが、息子に似て狡猾な目をしていた。

何故マルティナがあの本性に気付かないのか不思議でしょうがない。

ふと、名前を呼ばれた気がして振り返った。

「うをつ、いたのかよ！」

背後には無言のライナスが立っていた。

考え事をしていたとはいえ、自分の背中をいとも簡単に取られていた事にヴィンセントは驚いた。

この村に長く居すぎて、随分と平和ボケしてしまったのかもしれない。

「貴様は…… ティナの何だ？」

ライナスは思いつめた表情でヴィンセントをじっと睨んでいた。

「あー…… 安心しろ、何もねえよ」

先程のうなだれた彼を見ていたら、からかう気も挑発する気も起きない。むしろ、こうも不器用すぎると逆に応援してあげたくなる、と彼は密かに思った。

「ヴィンセント！」

「なんだ、今度はどうした？」

廊下の向こうからバタバタとアンとジェシカが必死の形相で駆けて来た。名前を呼んだのは彼女達だったらしい。

マルティナと仲の良い2人は顔が真っ青だ。

嫌な予感がある。

「どうしよう、マルティナが……」

「ティナがどうしたんだ！」

ライナスはアンの肩を掴み、続きを急かした。

「ラ、ライナス様っ？」

驚いたアンの横でジェシカが口を開く。

「村が……馬に乗った集団が来たの。煙も見えて……それでマルティナが村に行っちゃったのよ！ 危険だから駄目って言ったのに――」

「あの馬鹿がつ！」

そこまで聞いたライナスは駆け去っていく。

ヴィンセントさえ最後まで聞かずとも状況は理解できた。

恐れていた事が起きてしまった――。

——数分前の事。

ヴィンセント達と別れた後、マルティナは桶を手に水を汲むため井戸へと歩いていった。

そしていつものように井戸の前ではすでにアンとジェシカが興奮気味で無駄話に興じている。

「また怒られるわよ」

そう言うのと、待つてましたと言わんばかりの2人は、にやにや笑いでマルティナを囲むように両隣に立った。

「朝からヴィンセントと丘デートしてたでしょ？」

「仲のよろしい事でっ！」

今朝の出来事を見られていたらしかった。

「丘デートって……何よそれ？ そんなじゃないわ」

アンとジェシカはお互い目を見合わせると、にんまりと笑みを深める。

「まったくまた！ 私たち見てたんだからねっ」

「ヴィンセントがマルティナのほっぺにキスしてたわ。その後仲良く追いかけてこんなかしちゃって！」

このこのっ幸せ者！ などとつつつくジェシカに、マルティナは開いた口が塞がらなかった。

あれは彼に失礼な事を耳打ちされたただけだ。怒ったマルティナに対してヴィンセントが逃げるものだから、つられて追いかけてしまった。

それなのに、他人から見たらまるで恋人同士の蜜月のように見えていたのだろうか。

「やつ、違うわよ、何言ってるのよ！」

「顔が赤いわよマルティナ。からかわれなくなったら、今度から薄暗い森の中のことね！」

「やあだジェシカだったら、森の中で何をするの？ いやらしいっ」

「アンこそ何を想像したのよ！」

や、やめてー！

「あのねっ！——2人とも聞いてったら」

誤解を解こうと必死のマルティナに対して、アンとジェシカは興奮ぎみに卑猥な会話を繰り広げつつある。彼女たちに恥ずかしいという感情はないのだろうか。

その時だった。

マルティナの視界の端に、黒い何かが映った。顔を向ければ、村に隣接する森から黒い集団がわらわらと現れ始める。

「あれ、なにかしら？」

「誤魔化したってダメよ、マルティナ！」

遠目だとよくわからないけれど、その集団は馬に乗っているらしかった。

領主一行の狩りは明朝からだ。そもそも貴族であつたなら、馬を下りずに村へと雪崩れ込む事はしないだろう。

アンとジェシカもその異様な光景に閉口する。

「もしかして……盗賊？」

マルティナはぼつりと呟いた。

「やだ、どうしよう。村にはジャックが、父さんと母さんが——」

ぺたりと座り込んで、アンが震える声で言った。

「アンしっかりして！ ジェシカも！ この事を騎士の誰かに伝えるのよ！ ヴインセントもここににいるから探して急いで伝えて！」

「マルティナはどこに行くのよ？」

駆け出したマルティナをジェシカが大声で呼び止める。

「あたしは、時間を稼ぎに先に村へ行くから——」

あのような集団は主や城を持たない。あるいは主を失った騎士や傭兵で結成されると聞いたことがある。街や村を襲っては金品を奪い、女子供を攫うと、他の国や街に連れて行き奴隷として売る。

北の方へ行くとしばしあるらしいが、こんな田舎には来たことが

なかった。

オネット村の西側と南側には深い森があり反対側から一直線で抜ける事は容易ではない。北には栄えた街があり村に来るより先にそこを襲う。そして東には領主の城があった。

そんな平和ボケした村には、傭兵もいなければ戦い慣れた農民もない。村が今頃どんな混乱に陥っているのかも想像ができなかった。

マルティナは丘を必死で走る。

心臓は早鐘のように胸を打ち、息を吸う度に肺は悲鳴を上げた。下り坂は一步一步を大股で進む事ができたが、バランスを崩せばきつと顔から転んでしまふだろうという危うい状態。

「わっ」

足がもつれて転びそうになる所を、持ち前の運動神経を駆使してどうにか踏みとどまる。

それでも勢いが付きすぎた身体は止まる事ができない。マルティナは腕で顔を庇いながら受け身を取って一回転すると、その勢いを利用して起き上がった。

「もう！」

急いでいるのに、転んでいる場合ではないのに……。

けれど長いスカートが邪魔でうまく動けない。恥を捨ててスカートをたくし上げ、また走り始めた所で背後から馬の駆ける蹄の音が耳に入った。

敵かと思ひ後ろを振り返ると、それはライナスだった。

「ライナス、村が！」

「わかっている！ ティナは応援が来るまで村へ近づくな！」

そう叫ぶと彼は馬で彼女を追い抜いて行く。

「ライナス待つて！」

彼は帯剣こそしているが軽装だった。革の鎧さえも身に付けていない。

一人で何とかできる人数ではないのに、それでも彼はたった一人
どうにかしようというのか――。

「一人じゃだめよライナス！」

自分の事を棚に上げてマルティナは叫ぶけれど、彼は振り返らな
かった。

近づくと言われて言う事を聞くマルティナではない。一人だけ
隠れて見ている訳にはいかない、と彼女は息を切らせながらもライ
ナスを追って村へと駆けた。

村へ到着すると、中心広場に子供達が集められている様子が伺い
知れた。その周辺には鍬や鋤を構えた村人が息巻いている。

人質か、攫うために集めているのか、そのせいで村人は何もでき
ないでいる。膠着状態なのだろうとマルティナは推測した。

すでに数件の家は火をかけられて黒煙が立ち昇っていた。

広場にはライナスの姿があり、ひときわ目立つ燃えるような赤髪
と、悪趣味な赤い外套を身にまとった男と対峙している。

彼が盗賊の首領だろうか。盗賊ならば目立たない外套を着ればい
いのに。変な男だ、とマルティナは思う。

赤髪の男の周りには、下卑た表情を隠しもせずにライナスをねめ
つける男達が十数人。

息を整え、広場に向かおうとしたところで腕を掴まれた。

驚いて振り返ればリリーさんだ。

「行っちゃだめだよマルティナ、奴らは子供と若い娘を集めてるん
だ。きつと売りさばく気だよ。あんただって見つければ連れて行か
れちまう！」

娘達が屋敷にいる時間帯なのが不幸中の幸いだと呟いている。

幸いなんかではないというのに――。

野次が聞こえ、マルティナは広場を見やる。

赤髪の男は長い剣を抜いていた。その顔は笑っている。ライナス
は背を向けていて表情は読み取れない。

どういう状態なのかここからではまったくわからなかった。

「なんとかしないと！」

マルティナはリリーさんの腕を振りほどいて広場へと向かった。

「生意気な小僧だ、どうやら死に急ぎたいらしいな」

赤髪の男の声が聞こえてきた。

マルティナは村の男達の間を縫って広場へ近づく。

何度か腕を引かれたけれど、その度に振りほどいた。

「何の目的で来たかは知らないが、オールブライト伯爵の領地を荒らした罪は重い。貴様の血であがなってもらうぞ」

普段聞いた事のない口調でライナスは言う。その声は冷たく冷静そのものだった。

男は馬の腹を軽く蹴るとライナスとの距離を縮めた。よく見れば腹が立つほど余裕の笑みだ。

ライナスを小僧と表現していたが、その男は20代半ばに見える。

「待ちなさい！」

そんな赤髪の盗賊とライナスの間に、マルティナは飛び出した。

「この村には何も無いわ！ 出て行ってちょうだい！」

戦いを始めてはいけない。ジャスティンが騎士を連れて来てくれるまで時間を稼がなければ、始めてしまったら、きっと村人にも被害が及んでしまうかもしれないから……。

「ティナ！」

ライナスは驚いた声を出した。

「なんだ、若い女もいるじゃないか。隠し立てするのは良くないな。他にも居ないか、いつそのこと村ごと焼き払ってあぶり出してやるうか」

自分の言った事が可笑しかったのか、くつくつと笑うその男は、長い髪を一本の三つ編みにして肩にたらししていた。右目を眼帯で隠し、ワインレッドの左目だけを細めてマルティナを見ている。

はためく赤い外套の裏地は黒だ。裏表を間違えているのだとしたら、とんだ大馬鹿者だろう。

「そんな事、あたしが許さないわよ！」

マルティナは馬上の男を睨む。隙について狙うのなら、右から――

「許さない、か……」

男は指をパチンと鳴らした。部下への何かの合図かとマルティナは身構えたが、突然藁ぶきの納屋から炎が上がった。

「火矢……？ 見えなかったわよ」

「違う、魔術だ。この男は火の魔術師だ」

ライナスが悔しそうに呟く。

男を見上げれば、してやったりといった表情で満足げにしていた。村を焼き払おうとすれば、造作もなく出来るといふ証なのだろう。

「だからなんだって言うのよ！」

「随分と威勢のいい女だな！ 気に入った、オレ様の女にしてやる」

男は愉快そうに笑い声を上げた。

「なに言って――」

「何を言うか、賊がつ！」

ライナスがマルティナの前に移動する。腰の剣を抜くと腕を伸ばして男に向けた。

その剣は馬上用の長いものではなかった。お互い騎馬の状態で戦うのならライナスには不利だ。

「下がってライナス！」

ならば自分を女だと思って油断しているうちに、マルティナが時間稼ぎをすればいいのだが、先ほどの男の台詞に立腹したライナスに時間稼ぎという概念はなかった。

「お前が下がってる！」

ライナスはマルティナを見ずに言い放つ。

それから、一触即発のこの状態で、赤髪の男もライナスも一言も発しなかった。

この現状をどうにか打破しなければ……焦りばかりが先走る。

「きゃあ！」

その静寂を破ったのは他ならぬマルティナ自身だった。突然の彼女の悲鳴にライナスは思わず振り返る。

背後からそつと近づいてきた男の部下にマルティナも、ライナスさえもまったく気付かなかったのだ。

「いやっ離して！」

腕を捻られ身動きができず、マルティナは呆気なく敵の手に落ちた。

離れようと抵抗しても、腕をより捻り上げられれば痛みで何もできなくなる。いくら強いと自負していても、男の力の前ではこうしてされるがまだ。

女である事が悔しくて、何もできない自分に対して嫌悪する。

「その汚い手を離せ！」

マルティナに気を取られたライナスのその隙を見逃さず、赤髪の男は剣を振り上げた。

「ライナス、後ろ！」

はつとして降り返るライナスと長い剣の動きの全てが、マルティナの瞳にゆつくりと、そして鮮明に映った。

鮮血が舞い眼前を赤く染める。痛みに顔を歪めバランスを崩して落馬するライナス。その向こう側で嘲笑を浮かべる男の冷たい瞳――。

「ライナス！」

地に落ちたライナスは立ち上がりうとして、それでもできずに脇腹を押さえて倒れ込んだ。そこから赤い染みが急速に広がっていく。咄嗟にライナスに駆け寄ろうとするが、腕を引かれて駆け寄る事も許されない。

「離して！　お願い、手を離して！」

落馬しても剣を離さなかったのは騎士の名誉を捨てていないから？

こんな状況でもマルティナの一部分はどこか冷静にライナスを分

析していた。生前に父が何度も言っていた事を思い出す。立派な騎士は、何があるうとも例え死を覚悟したとしても、決して剣を捨ててはならない――。

立派な騎士じゃなくてもいい……剣なんか捨てて早く止血をしなければ。

「お願い、血を止めないと死んでしまうわ!」

マルティナは懇願するように赤髪の男を見つめた。

「当たり前だろ、殺すつもりでやったんだから」

剣の切っ先からは、ぽたりぽたりと赤い雫が滴り落ちている。男の目には何の感情もない。

殺すつもりでやった――それは真実だった。

「ティナを、離せ……」

ライナスは脂汗を額に浮かべ、苦悶の表情で起き上がろうとする。身体に力を入れれば、それだけ体内から血液が流れ出た。

「やめて……だめ、それ以上動かないで！」

ライナスは剣を地面に突き刺しゆっくりと片膝で立つ。

彼を止めようと掴まれている腕からどうにか逃れようとするけれど、暴れるマルティナを、男は片腕を首に回して後ろから抱きかかえるように押さえ込んだ。

首を軽く絞められると同時に、首筋に生温かい息がかかり思わず顔を背ける。

「それはオレの女にするんだ、余計な事はするなよ」

赤髪の男は部下を一瞥すると、馬首をめぐらせ離れて行った。

「その手を……離せと言っている！」

ライナスは剣に体重をかけ、渾身の力を振り絞って立ち上がった。滴る血は服を赤く濡らし、既にライナスの顔に色はない。

男はライナスを挑発するかのように気色悪い笑い声を出すと、マルティナの首筋を舐めた。

「ひゃっ」

マルティナはあまりの気色悪さに驚いて声を上げた。

それがいけなかった。

ライナスの瞳に炎が宿ると、剣を地面から抜き振り上げる。

そんな余力が残っていないと思っていたのだらう、驚いた男はマルティナを突き離して腰の剣に手を伸ばす。

しかし、剣を抜く前に彼は断末魔の叫びを残して事切れた。

倒れて動かなくなつた男の姿を確認すると、ライナスはとうとう剣を手放して膝から倒れた。

「ライナス、ライナス！」

マルティナは傷口を押さえ止血しながら声を掛ける。けれど反応はない。

彼のかすかな息遣いを確認し、まだ手遅れではない事を祈る。自分さえ油断しなければ、彼はこんな事にはならなかったのに――

――！

目頭が熱くなる。ぽたりぽたりと水滴がライナスの頬に落ちた。

「ライナス！」

お願い、死なないで！

「瀕死のくせに、やってくれたな」

赤髪の男の声が頭上から聞こえてくる。いつの間にか戻って来ていたようだった。

顔を上げれば怒りを抑えた表情でライナスをじっと睨んでいる。

「仇は討たせてもらうぞ」

そう言うのと、彼は剣を逆手に持ち替えた。振り下ろせばライナスの心臓を刺し貫く事のできる位置だ。

「卑怯だわ！ 意識のない相手にする事じゃない！」

「オレ達は品行方正な騎士サマじゃないんだ。卑怯だろうと何だろうと関係ない」

そうだ、彼らは騎士じゃない……。卑怯な手段も卑劣な行為も何だろうと顔色変えずに行う盗賊だなのだ。男の片目がぎらりと光る。「さっさとそこをどけ。一緒に死にたいのか？」

ため息と共に男の声が落ちる。マルティナはライナスを庇うように身を乗り出していた。彼女の下には意識のないライナス。

あたしさえ、あたしさえしっかりしていれば――。

ドクン、とマルティナの心臓が大きく脈打つ。

あたしが捕まらなければ、ライナスは怪我をしなかった――。

パキン、とマルティナの内側から何かが割れた。割れた何かは、彼女の胸から掌から身体全体から溢れ出る。

「どこかぬなら一緒に殺すまでだ。勿体無いが――」

キイイインと激しい耳鳴りがして男の声が聞こえなくなる。

卵を内側から破るような、そんな不思議な感覚にマルティナは少し目眩を覚えた。

ぼたりぼたりとライナスの冷たくなりつつある身体にまた雫が落ちる。

青空だった空はいつの間にか曇天となっていた。空から落ちる雫は数を増し、あっという間に大地を濡らす大雨となる。

「何だ突然、雨？　しかもこれは……水の魔術か？」

そして、ゆつくりと、確実に大地が振動し始めた。遠くから関の声が聞こえる。

「騎士が来てくれた！」

誰かが叫んだ。

「チツ、ずかるぞ。掴めるだけ掴んでいけ！」

掴む……？

マルティナは目眩のする頭を押さえて顔を上げる。

止めなければ——子供達が攫われてしまう！

「お前も来い」

赤髪の男が馬上からマルティナの腕を掴んだ。

「お断りよ！」

きらりと空が光ると、鋭利なガラスが赤髪の男めがけて降ってきた。ガラスの欠片を避けようと彼はマルティナの腕を放す。

ガラスは彼の頬を切ると地面に深く突き刺った。それは氷柱Crabのように先の尖った氷の刃だった。

雨の他に氷の塊までもが降ってきたのだ。

星のようにきらきらと瞬く氷の刃は雨と共に暗い空から降り注ぐ。見上げれば流星群の夜のような、幻想的な光の筋が幾重にも流れていた。

そして何故か無作為に降る氷は盗賊にしか当たらない。

子供を抱える男の背中や腕に突き刺さると、彼らは悲鳴を上げて手放した。身を守るのに精一杯で誘拐どころではない。

「クソッ！」

腰に刺していた短剣で氷の刃を弾きながら、赤髪の男は森へと馬を走らせる。

混乱した盗賊達は彼に続いて蜘蛛の子を散らすように逃げて行った。

騎士の集団が村に着くと同時に雨は止み、空には大きな虹がかかる。

遠くでジャスティンが騎士に指示している声が聞こえた。声を頼りに探してもどこにいるのかわからない。

我が子を抱き上げようと右往左往する村人や、互いの無事を喜ぶ人々の間から、マルティナ、と呼ぶ声が聞こえて振り向いた。

「ヴィンセント……ライナスが！ 早く治療を——」

雨に打たれて冷えきったライナスの顔は青白い。

マルティナは泣きそうだった。もしかしたら泣いていたのかもしれない。髪から水が滴り顔に流れている。

「なんとかしないと……」

ライナスの横にしゃがみ、さっきまでしていたように傷口を抑えた。

「落ちて着けマルティナ、彼は大丈夫だから」

「何を、言っているの？」

こんな状態のライナスを見て真面目な顔で大丈夫だ、と発するヴィンセントが信じられなくて、マルティナは声を荒てしまう。

「大丈夫なわけないでしょう！ 大量に血を流しているのよ？」

「癒しの雨が降った、傷を癒す水の魔術だ」

「癒し……水の、魔術？」

意味がわからなくて戸惑っているマルティナの手を、ヴィンセントはライナスから離そうと掴んだ。手は離れる事を惜しむかのよう

に抵抗する。

「傷の様子を見たいんだ」

大丈夫だから、と囁かれ、マルティナはやっと手を離れた。血に濡れた手は、マルティナの意に反して小刻みに震えている。

ヴィンセントが赤く染まった上着を破ると、そこにあるはずの傷はなかった。

確かに切られ、血液がとめどなく流れていた傷が。

「でも……目を覚まさないわ」

「貧血だろう。大丈夫、じきに目を覚ますから」

ライナスは蒼白な顔で横たわっている。

顔にそつと触れようとして、自分の手が血まみれだった事に気付いた。彼の綺麗な顔に血を付けてしまう事に躊躇い、マルティナは手を引っ込める。

ライナスの様子を見に来た騎士に、ヴィンセントは二言、三言何かを伝えると座っているマルティナの腕を引いて立たせた。

騎士は今までマルティナの居た場所に座りライナスの様子を確認し始める。

心配した面持ちで見ていると、ヴィンセントは掴んでいた彼女の腕を引いて歩き出した。

「や、ちよつと!」

逆らってもヴィンセントの腕から逃れられない。ライナスの周りに他の騎士も集まり、彼を取り囲むとマルティナからは見えなくなってしまった。

「離してヴィンセント!」

ライナスが本当に意識を取り戻すのか心配だった。

聞こえているはずのヴィンセントは一言も発せず、振り返りもしない。

「離してつてば!」

意識を取り戻すまではライナスの傍にいたかったのに――。

広場から離れると、ヴィンセントはやっとマルティナの手を離れた。

「ヴィンセント、あたしライナスの傍にいたい」

彼は先ほどの雨で水がたまっていた桶を拾うとマルティナの両手を乱暴に押し込む。

急に腕を引かれて肘の関節に痛みが走った。

何を怒っているの？

無言のヴィンセントに戸惑いを感じて、マルティナは抵抗できずされるがままにした。彼はマルティナの手を水の中で擦り、血の汚れを落とし始める。

無色透明だった水の表面にゆっくりと赤い染みが広がるのをマルティナは黙って見つめていた。

「魔力が目覚めたんだ……」

ずっと黙っていたヴィンセントが突然口を開いた。

「そう、なの……？」

村に來た騎士の誰かに水の魔術が目覚めたという事だろうか。

「お陰で助かったわ……まだ助かったかはわからないけど」

汚れを落とされ綺麗になった両手を、身に着けている前掛けで拭いた。しかし水分を含んで重くなったそれは、マルティナの手を湿らせただけだった。

そういえば雨に濡れたんだっけ、とマルティナは思い出す。

遠くの広場は騎士や村人が行ったり来たりとまだ混乱が続いている。早くライナスの様子を見に行きたいのだけれども、ヴィンセントはそれきりまた黙ってしまった。

「ヴィンセント？」

彼はマルティナに何かを伝えたいけれど、言うべきかどうかを迷っている風だった。

もしかして人目を避けたかったの？

村人は全員が広場に集まっており、ここにはマルティナとヴィンセントしかない。

まさか……。

「ヴィンセント、まさかあなたが水の魔術を？」

だからさつきからおかしな態度だったのだろう。人気のない所にマルティナを連れてきて、その事実を伝えたかったのかと勘繰る。しかしその疑問は彼の違う、という否定の言葉で一蹴された。

「マルティナ……君が、だ」

あたしが、なに？

「君の力だ」

ずっと目を合わせなかったヴィンセントがマルティナを凝視した。不安と後悔の念が横切り、まだ何かを迷っている彼の瞳を見つめ返す。

「あたし……？」

傷を癒した雨も、盗賊だけに当たった氷の塊も？

「あ、あたしがやったの？」

マルティナは自分の手を見つめ、握ったり広げたりを繰り返した。血の汚れは取れたけれど、爪には土と血の混ざったものがまだ残っている。

「そんなはずないわ」

自分の身体に変化は特に見られない。怒りと焦燥感で少し眩暈を感じたけれど、それ以外に、例えば溢れんばかりの魔力や、新しく身についた力というものは何も感じなかった。

もちろん魔力を持つという感覚はわからないのだけれども。

「あたしじゃないみたい。違う誰かよ」

もしもヴィンセントが誰かと勘違いをしているのなら、マルティナの近くに居た人物――。

「ライナスじゃないかしら？」

「俺は間違えない。マルティナだ、君は……水の魔女だ」

ヴィンセントはマルティナをじっと見つめた。その眼光は揺るぎなく目の前の彼女を射すくめる。

その眼力に気圧されてマルティナは彼から一歩離れた。

「マルティナは、水の力を持った魔女だ――」

ヴィンセントはマルティナとの距離を詰めると、彼女だけに聞こ

える
声音で
呟いた。

どうして俺はいつもこうなんだろう——と思った。

最後の記憶は、降りしきる雨と空、それから目に涙を溜めたマルティナだった。

ライナスが彼女を泣かせたのはこれで3回目となってしまった。マルティナはきつと気付いていないだろうけれど……。

始めて泣かせたのは騎士団長だったローレンス卿が、マルティナの父親が亡くなった時だった。

ローレンス卿の亡骸を前にしたマルティナは、唇を噛んで涙を堪えその事実を受け止めようとしていた。

体格もライナスと変わらなかったマルティナが、あまりにも小さく見えて震えていたから、我慢しなくてもいい、と声をかけた。

多分、それ以上ローレンス卿の亡骸を見ていたら、自分が耐えられなかったからだと思う。彼はライナスを我が子のように誉め、叱ってくれた人だった。

自分の父親がくれなかったものを、ローレンス卿はライナスに与えてくれた。

目に涙を溜めて振り返るマルティナの顔を見ていたら、自分が今にも泣いてしまいそうだと気付いた。

そんな顔を見られたくなくて、涙が零れそうになったその瞬間、咄嗟に彼女を抱き締めた。

男が泣くなんて格好悪すぎる……。

確かあの時、そう思ったんだ。

先にマルティナが泣けば、俺は耐えられるかもしれない。だから……。

「こういう時は、泣いてもいいんだ」

マルティナの耳元で囁いた。

もう少し背中を押せばマルティナが泣くと思ったんだ。

マルティナが泣けば、もし俺が泣いてしまっても気付かれないだろう？

思った通りその言葉でマルティナは、ライナスの胸で堰^{せき}を切ったように泣き喚いた。

騎士にあるまじき卑怯なやり方で、俺はマルティナを泣かせた。今まで涙を見せたことのなかった強いマルティナを――。

腹部の痛みはもうなかった。多量の出血で身体が麻痺したのかもしない。

だけど今度は胸が痛い。

この痛みはどうして麻痺してくれない――？

頼むから、もう泣かないでくれ……。

涙を拭おうとマルティナの頬に手を伸ばす。けれど、その手は空^{くう}を掴んだ。

ライナスの目に映るのは見覚えのある天井の模様だった。

「気がついた？」

ジャステインの声が聞こえる。声のする方へ顔を動かすと、ジャステインは本を手に窓辺の椅子に座っていた。

「ここは……？」

「何を言ってるの、それともボケちゃった？」

ここはライナスの与えられている部屋の寝室だった。

部屋の隅にあるドアを開けば、廊下を半周回らずにジャステインの部屋へ行ける造りとなっている。

一介の騎士が部屋を与えられている――それは次期騎士団長としての周囲からの期待と、ジャステインの近しい友であり、彼に一番最初に忠誠を誓ったライナスが賜った栄誉なのだ。

「何日たつたんだ？」

随分と長い夢を見ていた気がする……。けれどいくら夢の内容を思い出そうとしても、すくった水が指の間から流れ落ちるように、ライナスの記憶から消え去さっていくこうとするのは止められない。

「すごい生命力だね、まだ一日しか経っていないよ。それはそうと傷を見てごらん？　僕もさっき見て驚かせてもらったけど」

本をパタンと閉じてジャスティンは立ち上がる。

何を言っているのかわからなかったが、ライナスはベッドから半身を起こし掛布をめくった。

何も身につけていない上半身、腹部にあるはずの傷は、傷跡も何もない。

「水の魔術だつて。すごい治癒の力だよ」

あの後意識を失ったが……。

「そうか、治癒の魔術で助かったのか」

ジャスティンはいたずらっぽい笑みを浮かべて微笑む。

「さて、ライナス。何か欲しいものはある？」

その笑みの裏側に彼の安堵の色を垣間見た。きっと心配させてしまったのだろう。

主を心配させるなんて臣失格だな、とライナスは思った。けれどこの安息感が心地よくライナスの口から自然と笑みがこぼれる。

「喉がカラカラだ、何か飲みたい」

「わかった。この僕に頼むなんて、いい身分だよまったく」

ジャスティンは憎まれ口を叩きながら廊下へと続くドアを開けた。閉める直前でにやりと笑みを浮かべる。

「酒は持つてくるなよ」

音も立てずにドアが閉まった。

最後の笑顔が気になって、ライナスは念のため忠告した。聞こえたかどうかはわからないけれど、ジャスティンがまた何かを企んでいるそうだったから。

窓辺に目をやると小机に10冊程の本が無造作に重ねて置いてあった。そして床には空になったワインの瓶が数本転がっている。

「本当に、領主らしからぬ事をする……」

怪我人の面倒なんて使用人に頼めばいいものを、彼は今までずっとこの部屋にいたのだろう。

こういうところ、ジャスティンは昔から変わらないんだ……。

傷の痛みはないが、気分はすこぶる悪かった。少し起き上がっただけで頭痛と吐き気に見舞われる。

これが貧血という症状か……。

ライナスはベッドに倒れ込み、こめかみを押さえながら目を瞑った。

——二人きりの時は敬語を禁止にしよう！

それはある日突然ジャスティンが発した言葉だった。いつだったかは覚えていないけれど、ローレンス卿の元で剣の腕を磨いていた頃だった。

その提案を聞いて、何故マルティナがジャスティンに対して敬語を使っていないのかに気付いた。

ライナスよりも先に彼に許されたのだらうと知り、彼女に対して闘争心を燃やした。

そうだ、恋心が芽生えるより先に闘争心が生まれたんだっけ……。突然思い出した懐かしい記憶に何故だか笑いが込み上げてきた。

切られたあの瞬間に死を覚悟したからだろうか。

剣を受けた腹部を触ってみるが、傷を付けられた形跡も治った傷跡の感触もなかった。

「不思議なもんだなあ……」

傷跡も残さないとは、よっぽど魔力の強い魔術師だったのだらう。オールブライト伯爵に使える水の魔術師はそこまで腕が立つとは思えない。

それ以外の水の魔術師か……？

ふと疑問が脳裏を過ぎったが、ノックもなくドアが開きその思考はすぐに中断された。

ジャスティンが戻ったのだらう、彼はしばしばノックを省略するのだ。

「ライナス、いいもの持って来たよ——大丈夫？」

「ああ、血が足りなくて……少し気分が悪いだけだ」

ライナスは半身を起こした。シャツくらいは羽織ろうかと思ったけれど、それもできそうにない。

顔を上げるとジャスティンの後ろには、心配そうに立つマルティナがいた。

「ティナ！」

ただでさえ少ない血が、急に頭に上った気がした。

「ライナス、あたしのせいで……本当にごめんなさい」

マルティナは今にも泣きそうだ。

「ティナのせいじゃない、俺はもう大丈夫だ！」

そう言って急いで立ち上がったなら足元がふらついた。

「さっき気分が悪いって言ったじゃない、いいから横になって！」

マルティナに弱っている所を見せてしまった……。格好悪いにもほどがある。

ちらりとジャスティンを横目で見ると、彼はとても嬉しそうにしていた。

やってくれたな……！

あの時の笑顔の意味がやっと分かった。

「ライナス、シャツは着られる？ ティナに手伝ってもらおうか？」

ジャスティンの提案に即座に反応したマルティナは、ライナスの白いシャツを拾い上げると気合の入った表情で広げて待っている。

ライナスは天の助けを求めるように天井を仰ぐ。……けれど、残念ながら神の啓示は降りてこなかった。

「それから、確か喉が渴いていたんだっけ？」

シャツに腕を通す作業を終えたマルティナに、ジャスティンはまたもや余計な事を伝える。

ボタン留めは自分でできるから、と拒否した後の事だ。

手持ち無沙汰になっていたマルティナは、心得たりといった面持ちで水差しから水を汲むと、そのコップをライナスに手渡す。

「あ、ありがとう……」

受け取るとマルティナと目が合った。どうやら飲み干すまで放っておいてくれないらしい。

空色の瞳に見つめられながらコップを空にすると、今度は温かいシチューの乗った銀のトレーを持って待っている。

そしてシチューを口に運ぶライナスの動作を、ひとつも見逃すものかといった勢いでマルティナは凝視する。

「ティナ……気が散って食べられない」

「あ、そうよね、ごめんね」

「ライナスったら羨ましいなあ」

そんな様子を楽しそうに眺めるジャスティンを、ライナスは恨みがましく睨め付けた。

ジャスティンからの軽い嫌がらせを受け流しつつ、水分はきつと血になるわ、などと言うマルティナから半強制的に渡された十数杯目の水を口に運んでいる時だった。

ノックの音が聞こえ、使用人がヴィンセントを連れて来た。彼に見舞ってもらったほど仲良くなった覚えはないのだが、ジャスティンはさも当たり前のように彼を中に入れる。

そして何故か人払いをすると、そのままドアに寄りかかった。

「さて、当事者が集まったね。今後の事を話し合おう」

「今後？　どういう事だジャスティン？」

訝るライナスをよそに、彼はヴィンセントに目くばせする。

口外するなよ、と前置き、今度はヴィンセントが話し始めた。

「お前を救った水の魔術は——あー、マルティナの力だ」

——は？

「マルティナは、水の魔女としての力を目覚めさせたんだ」

「マルティナが……何だつて？」

「水の魔女、だよ。ちゃんと聞いてなよライナス」

マルティナに視線を移すと、彼女は力強い瞳で、まっすぐにライ

ナスと視線を合わせて軽く頷いた。

「魔女……本当なのか？」

「本当よ、お城の魔術師に確認してもらったの……」

マルティナはちらりとヴィンセントを見る。つられてライナスもヴィンセントに目を向けた。

「魔力を持つ者は他人の魔力もわかるんだ。だれが魔術師なのか、隠していても微かだが感じ取れる。しかも——盗賊団の中に火の魔術師がいたんだろ？」

ライナスは頷く。そしてヴィンセントの懸念を瞬時に理解した。ならば彼らは気づいているはずなのだ、魔女という存在に。

「それって……大変な事なんじゃないのか？」

魔女が貴重な存在だということはライナスだって知っている。魔女が原因で起きる戦も、その戦で侵略され消えゆく小国の存在も。

「大丈夫よ、なんとかなるわ」

明るいマルティナの声が聞こえて、ライナスは彼女を振り返った。なんとかなる、本当にそう思っているのか——？

見れば、マルティナは指の関節が白くなるほどに手を握りしめていた。

「大丈夫だから……」

彼女は呪文のようにその言葉を繰り返す。

魔力が目覚めた——。

それは、マルティナがこれから魔女として狙われ始めるという事だ。

「村を離れた方がいいだろう。奴らは必ずここに来る。魔女を奪いに……」

ヴィンセントの言葉はライナスの胸にも深く突き刺さった。

魔女として、力が目覚めた——。

それは、マルティナが第二の故郷であるオネット村からも出て行

かなければならない事を意味していた。

ヴィンセントに魔女だと聞かされてもマルティナに自覚はなかった。

「どうしてわかるの？」

俺にはわかる、と言ったヴィンセントに尋ねたけれど、彼はその疑問には答えない。そのうちジャスティンが現れると一緒に広場へ戻ってしまった。

村の外れに一人残されたマルティナは、もう一度水の中に手を入れた触れてみた。すると今度はマルティナの身体で何かがざわめいた。

彼女はこの時、直感的にこれが魔力なのだと理解したのだった。

魔力の殆どは親から子へ受け継がれるものだと前にヴィンセントが言っていた。ある日突然授かったとしても、血を遡れば魔力を持つ人物に行き当たるのだ、と。

ローレンス家は騎士の名門一族であるが魔力を持つ親戚の話は聞いた事がなかった。

「もしかして、あたしの母さま……？」

可能性があるとすれば、顔も声もぬくもりさえも知らぬ母親と、その一族――。

しかし母親の出身地はおろか、親戚が存在するかさえもマルティナにはわからない。マルティナの母は、父が遠征の地で見初めて城に連れてきたのだと聞いただけだった。

母親が貴族出身ではなかったため、結婚する時は一族間で随分揉めたのだとか。

「もしも母さまから受け継いだのだとしたら……嬉しい」

亡くなる間にマルティナという名前を授けてくれた母親からの2つ目の贈り物――それがこの魔力なのだとしたら、村を離れる事

になったとしてもマルティナにとって苦にはならない。

母親から受け継いだ愛すべき力なのだから。

逆にこの力のせいで村に被害が出てしまつたろう事に心が痛んだ。噂が広まればオネット村を襲い魔女を手に入れようと考える輩がたくさん現れるのだらう。あの赤毛の盗賊のように。

目を瞑ると、ジョンおじさん、リスおばさんの笑顔が脳裏によぎった。マルティナを今まで育ててくれた大事な家族だ。アンやジェシカ、ジャック、リリーさん、村のみんな……。

絶対にみんなを危険には晒せない。ならば早く村を離れなければ――。

「大丈夫よ、なんとかなるわ」

村の事はきつと心配ない。ジャスティンが約束をしてくれた。ほとぼりが冷めるまで村は騎士が守ってくれる……。

それよりも腹立たしいのはあの男だ、赤毛で悪趣味な盗賊の首領。魔術が十分操れるようになったら、いつか絶対に復讐してやるわ！　そう、氷漬けにして炎が出せないようにしてやるのよ。

マルティナは誓いを込めて拳をぐつと握った。

大丈夫、あたしはやればできる子なのよ！

「大丈夫だから……」

マルティナは自分に言い聞かせるように小さくつぶやいた。

しかし、なぜ彼らはわざわざ森を突き抜けてオネット村に来たのだらうか。森の奥には狼などの肉食の獣も出るため、村の人も騎士も深くは入らない。森の奥へ入らなくても鹿や猪を狩ることができるのだ。

目的がなければ森を突っ切る事は普通はしない――彼らは何故そんな事までして……？

「マルティナ、聞いているのか？」

「えっ」

ヴィンセントに名前を呼ばれ、マルティナは現実に戻された。彼は腕を組みこちらを見ている。

ライナスを見ると暗い顔で下を向いていた。どうしたというの？
ヴィンセントの後ろでドアに寄りかかっていたジャスティンと目が合う。マルティナにウィンクをすると、彼特有のいたずらをする前の楽しそうな笑みを湛えて、明後日の方向の少し下を見た。

それを意味している事は――。

「えつと、あした？」

「ああそうだ、明日の朝にはここを出発した方がいいだろうな」

「そ、そうね……」

いつの間にかそんな話になっていたらしい。自分の事だというのに聞いていなかったとは……。

マルティナは頭を振って必要のない考えを頭から閉めだした。母や復讐の事は時間ができた時に考えればいい事だ。

「僕からの提案なんだけど、この際だからティナは城で守ろうと思うんだ」

どう？ と微笑みかけるジャスティンを、マルティナは驚いた顔でまじまじと見つめた。

「お城で？」

戻れるの？

「何を言っている、今度は城が標的になるぞ。城で匿うより魔女の集落に行くべきだろう」

そうだ、今度は村ではなく城が標的となってしまう。マルティナの淡い期待はすぐにしぼんだ。

「ねえヴィンセント、魔女の集落って何？ それはどこにあるの？
もしそこに行つて、次にそこが狙われてしまうのならあたしは行けないわ」

もしも名前の通り、魔女が集団で暮らしていたら、それこそ格好の餌食ではないのだろうか。

マルティナはヴィンセントに疑問の顔を向けた。

「魔女の集落にはたくさんの魔女が暮らしている。けど集落といっても一つの村じゃないんだ。王都シャノンの城壁内にある」

高い城壁に囲まれた王都シャノン——その中に存在するが、国王に管理されているわけではない魔女達の自治区、それが魔女の集落と呼ばれるものだった。

もちろんその集落を襲えば確実に王への反逆と見なされ処罰される。また、王に仕える領主の領地に囲まれた位置に存在するため、他国から侵略される心配もまずない。魔女が集落に入り名目上保護されれば争いの火種になる事はないのだとヴィンセントが説明してくれた。

「それなら安心だわ、あたし魔女の集落に行く」

「僕は反対だ、シャノンに行く間に襲われない保証はない。ここから何日かかると思っているの？ 城でも十分守る事ができるよ」

「でもジャスティン、お城の人たちに迷惑はかけられないわ」

城にはオールブライト伯爵に仕える騎士の家族も暮らしている。

衣食住の面倒を見る使用人だっているのだ。もしも敵に攻められれば、戦えない彼らが真っ先に傷ついてしまう。そして城が陥落すればマルティナだけでなく彼らの住む場所が奪われてしまうのだ。

魔女が城で匿われているという、たったそれだけの理由で……。

それは絶対に避けるべき結末だ。

「ティナはどうして……他人の事よりもまず自分の事を考えなよ？」

そんなマルティナを見て、ジャスティンは怒りの感情を抑えたような声音で言う。

「ちゃんと考えてるわよ？ だからあたしは村にも城にもいちゃいけないのよ」

「全然考えていないよ………もう少し僕に頼ってよ」

ジャスティンの言葉の後半は、声が小さすぎて聞こえなかった。けれど自分の身を案じての提案だという事はマルティナもよくわかっている。

ジャスティンはやさしすぎるわ……。マルティナは心を痛めると同時に、こうして優しさを表してくれる彼に対して心が温かくなるのを感じた。

だからもう誰も巻き込んではいけない——マルティナは心を決めてジャスティンを見つめる。

「ねえ、ジャスティン……」

「それに城の騎士は強いよ、ライナスだっているんだから！」

そのライナスはマルティナのせいで怪我を負った。死ぬかもしれないなかったのだ。あの瞬間を思い出すだけで何とも言えない不安に駆られる。

自分のせいで誰かが傷つくのはもう見たくない。

「ジャスティン、やっぱりそれはいけない事よ」

城で匿ってもらった訳にはいかない。あまりにも多くの人を巻き込んでしまうから。

「ティナはなかなか自分の信念を曲げないよね……」

強い光を放つその瞳に見つめられれば、ジャスティンだって彼女がすでに決心した事は理解できた。

他人を巻き込みたくないという想いも、自分自身が狙われるという恐怖や不安も——だからそれを取り除いて安心させてあげたかった。けれどマルティナは自分が行くべき道を既に選択してしまった。誰にも頼らず一人で歩む茨の道を……もしも並んで歩いたら、道が狭すぎて二人とも棘で傷ついてしまう？

ならば——。

「いつそのこと城に閉じ込めてしまおうかな……」

恨み事を言う口を塞いで、逃げないように自由を奪って、城の一番高い塔に閉じ込めておいた方がまだ安心できるのではないだろうか。

小さな声で呟いたそれは、ヴィンセントにだけ届いてしまったらしかった。

彼は呆れ顔で振り返ると静かにため息を吐いた。

「確かに城も安全かもしれないけどな……なにも外からの敵だけ相手にすればいいってもんじゃない。城内だって身内にも気を付けなければならぬ」

「城の者がティナに危害を加えると？」

ジャスティンはムツとしてヴィンセントを睨んだ。

「可能性がない訳じゃない。オールブライト伯だって、あんたの父親だって欲しいはずだ、魔力を持つ自分の子孫が——」

それが作れる人間が傍にいるんだ、とヴィンセントは呟く。その言葉はジャスティンに対しても牽制けんせいしているように聞こえた。

魔女が子を産めば、かなりの確率で魔力は子供に継承される。魔術師が子供を産ませても子供が魔力を持って生まれるとは限らない。

なぜ魔術師よりも魔女が重宝されるのか——それは魔力を持たない権力者達が、自らの子孫に魔力を持った者を欲するためだった。

魔女は魔術師よりも魔力が強いだけではない。見た目で老いを感じさせず、常に美しく妖艶でいて……それ以外にも利用価値は多いにある存在なのだ。

「や、やだ……」

マルティナは手で頬を覆いしやがみ込む。彼女は初めてその意味に気付いたようだ——魔女が狙われる本当の理由^{わけ}を。

手の隙間から覗く真っ赤になった頬が可愛くて、つい笑みが零れてしまう。けれどジャスティンは急いで表情を取り繕った。

「そう、だね……」

かわいいマルティナ、妹のような存在だった彼女は、いつの間にか美しく強い女性に成長した。いつからだだっただろうか、彼女の存在が常に眩しく目に映るようになったのは——。

次期領主という重荷を意識した頃から？　ここに住む領民と領土を守るためならどんな事でもしようと誓った頃から？　それとも、領土に侵入した敵を、初めて自分の手で処分した時からかもしれない——。

ジャスティンは大きく息を吐くと、ゆっくりと吸った。

「ティナ、魔女の集落に行く準備を手伝うよ」

マルティナは顔をあげてジャスティンを見上げる。

安心させるように笑顔を作って微笑みかけると、マルティナも表情を緩めた。

誰かに横から奪われるくらいなら——魔女の集落にでも地獄にでも、どこへなりとも彼女を無事に送り届けよう。

「そこへ行けば魔力の扱い方も教えてもらえるだろう。力を内に秘める事ができるようになれば、すれ違っても簡単に魔女だとは気付かれないさ」

「ほんとに？　そしたら村に戻るのね？」

頷くヴィンセントに、マルティナは顔を綻ばせた。

「ジャスティン、あたし立派な魔女になって戻ってくるわ！ この力があれば簡単に焔に水をまけるし、怪我の治療もすぐできるわね！」

嬉しそうに話すマルティナが愛おしくて、ジャスティンは知らず知らずのうちに微笑んでいた。

「必要なのは馬と、食料と——」

「俺と一緒にいく」

黙っていたライナスが口を開く。きっと彼ならそう言うと思った。ライナスが一緒ならば心強いだろうと、ジャスティンは密かに思う。

「でも明日出発するのよ？ まだ動かない方がいいわ」

マルティナは心配そうにライナスに尋ねた。

「責任を取らせてくれ。奴の目の前で魔女の力を使ってしまった——そのきっかけを作ったのは俺なんだ」

「責任って……責任って何よ！ あたしライナスの重荷になんかなりたくないわ！」

「いや、そういう意味で言ったんじゃない！ ティナを——村人を守るのは騎士の務めだ。だから、自分のためにか、自分のせいだとか……う、自惚れるな！」

「な、なんですって！ よくも言ったわねっ！」

そんな二人のやり取りを見てみると、ずっと離れて暮らしていても昔と何一つ変わっていない関係が可笑しくて、眩しくて……これが日常なんだと感じて、ジャスティンは笑いが込み上げてくるのを止められなかった。

「まったく、不器用すぎだよ二人とも」

大切な幼馴染二人を見やり、ジャスティンはため息を付きながら言った。

「本当だな、見ていてイライラする」

ヴィンセントも横で頷いた。

彼は嫌いだが——もしかしたらこちら側の人間なのかもしれない

とジャスティンは思った。

「不器用って、イライラって何よ！　これはあたしとライナスの問題なんだから、外野は黙っててよね！」

はいはい、とジャスティンは答えて扉を開けた。

「僕は明日の準備をしてくるよ。ヴィンセント、君も手伝って」

マルティナの機嫌を損ねたのはライナスだ、後は自分で責任を取るべきだ。

罰として、怒れるマルティナと二人きりにしてあげよう、ちらりとライナスを伺うと、ジャスティンの気持ちを察したかのように彼はサーっと顔を青くした。

今回ばかりは助けてあげないよ、ライナス。

ジャスティンは静まり返った廊下をヴィンセントを従えて歩いていた。屋敷内に人が少ないのは、多くの騎士が村に逗留とまりゆづしているせいだ。

「君は随分と魔女の集落について詳しいようだね？」

「ああ、まあな……」

その事についてヴィンセントは多くを語りたくないらしい。

「行った事はあるのかい？」

言葉を濁す彼にジャスティンは尋ねる。

「王都に、という意味なら答えはイエスだ」

「その集落に行った魔女は、本人が望めば戻ってくる事はできるの？　王都に入った魔女の所有権は王のモノになるんじゃないだろうね？」

「それは……本人次第だな。彼女達は王都を好む。何でも手に入ると、魔女だというだけで周囲がちやほやしてくれる。だから田舎から出てきた娘は、それに慣れるとなかなか帰りたいがらない。それから何度も言うが王都にあっても集落の自治権は魔女達にある。本人が出たいと望めばその通りになるから、マルティナの事を心配して

いるのなら安心して良いと思う」

「そう……ティナなら大丈夫だね。きつと帰ってくる」

帰って来て欲しい……。何か約束をしておけば、彼女はその責任を果たすべく帰って来てくれるかもしれない。そのために何か約束をしておこうか。

帰ってきたら結婚しよう——とか？ 自分の馬鹿さ加減に呆れ、ジャスティンはフツと嘲笑を漏らす。

そんなジャスティンに気付かず、ヴィンセントは階段の小窓から覗く遠くの村を見ながら顔を曇らせていた。

「そうそう、奴らは君を探してここに来たようではないらしいよ」
ヴィンセントはぎくつとして目を見開いた。やっぱりね、とジャスティンは口元に笑みを浮かべる。

彼は何者かから逃げているのだろう。

「村人に確認したんだ。奴らは誰かを探していたわけではなかったようだよ。ただ純粹に、そこにあつた村を襲いに来たのだろうね」

「なら良かったよ、俺のせいじゃなくて」

ヴィンセントの目に怒りと悲しさの織り混ざった色が見えた。追われる理由はきつと誰にも、マルティナにも話さないのだろう。

「ヴィンセントの馬と食料も用意するよ。途中まではティナと一緒に行くんだろう？」

王都シャノンまでの道中、彼女を守るためにヴィンセントはきつと必要だ。

けれど、もしもマルティナにとって邪魔になったならば——。

「助かる」

ジャスティンの思惑に気付いたかはわからないが、ヴィンセントは無表情でそう呟くと、また村へと視線をうつした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7379w/>

空色の魔女

2011年11月4日10時08分発行